

# 東京都立産業技術大学院大学

ADVANCED INSTITUTE OF INDUSTRIAL TECHNOLOGY

---

## AIIT FD レポート 第39号

2026年7月

<https://aiit.ac.jp/>

# 目 次

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| 第 39 回 FD フォーラム .....               | 1  |
| 2025 年度前期「学生による授業評価」結果の概要報告 .....   | 26 |
| 2025 年度第 1 クォータ 教員各自のアクションプラン ..... | 33 |
| 1 共通科目 .....                        | 33 |
| 2 事業設計工学コース .....                   | 35 |
| 3 情報アーキテクチャコース .....                | 40 |
| 4 創造技術コース .....                     | 49 |
| 2025 年度第 2 クォータ 教員各自のアクションプラン ..... | 55 |
| 1 共通科目 .....                        | 55 |
| 2 事業設計工学コース .....                   | 58 |
| 3 情報アーキテクチャコース .....                | 62 |
| 4 創造技術コース .....                     | 72 |

## 第 39 回 F D フォーラム

産業技術大学院大学 第39回FDフォーラム

令和8年3月5日（木）

○開 会 午後 1時00分

**事務局** ただいまより第39回FDフォーラムを開催いたします。

それでは、学長よりご挨拶いただきます。

**橋本学長** 皆さん、こんにちは。初めに、今回のFDフォーラムで貴重なご講演をいただきます武蔵野大学響学開発センター長、かつ同大学教授の鈴木克明先生をお迎えできたことを大変うれしく思います。また、ご参加されている本学の教職員及び関係者には、このフォーラムをよきものにしていただくよう、ご尽力をお願いいたします。

ところで、今回鈴木先生をお迎えするに当たりまして、その所属のネームにありました響学という用語が教育に関わるということを今回初めて知りました。ありがとうございます。

さて、毎回のこととなりますが、FDであるファカルティ・ディベロップメントの意味を改めて考えたいと思います。FDとは、大学教員の教育能力を高めるための方法を大学全体として取り組む活動を意味します。本学は、専門職大学院であり、文部科学省の定めと東京都及び経済界の要請に従いまして、産業技術分野において国内外で活躍できる専門職業人、すなわち高度プロフェッショナルを育成するということを第一の使命としています。そのため、本学の入学生はエッジが効いて、もともとポテンシャルの高い社会人の方が多くいらしています。そのような方々のポテンシャルをさらに高めて、社会に送り返すということが本学の使命となります。

しかし、技術革新が激しい現在、何年も同じ教授法が通用するということではなく、日々教授法を全員で見直し、改善を図ることが必要です。特に昨今のAIの発展により、先ほど直にいろいろお話をしてきましたが、大手IT業界のボードメンバーの方々、いわゆる社長、副社長クラスの方々がおっしゃっていたのは、IT業界の働き方のもう9割を変えていかなければいけないというふうにもおっしゃっています。本学は、これらに対応できるような柔軟な教授法を日々考えなければなりません。その糧を得るまたは改善の指針を得るために、本日鈴木先生をお招きしました。

鈴木先生のご専門は、既に皆様方にお配りしている資料にあるように、教育工学であります。そのキャリアは、事前配付資料に書いてあるとおりでございますので、省略させていただきます。実を言いますと、私が教員になってから40年近く前からなのですが、鈴木先生が熊本大学時代における論文や著書を拝読してまして、それを私自身が大学時代のインストラクショナルデザインというのを行ってきました。その頃からすごい先生が世の中にはいらっしゃるものだなというふうに思っていたものです。でも、まさかそのご高名な先生が本日本学においてご講演いただけるとは少しびっくりしております。世の中いろんな縁があるんだなというふうに思っております。

そのような鈴木先生の実績と見識の下、本日のご講演テーマは「大学授業設計の点検ワークシー

トで担当授業を棚卸する」でご講演いただけるということです。この内容は、本学にとって大変貴重な知見を得られるものに違いありません。鈴木先生がお忙しい中、お時間を割いていただき、ご講演いただけることを改めて御礼申し上げます。

それでは、フォーラムを開始するために司会者にマイクをお返しします。

**越水教授** 橋本先生、ご挨拶ありがとうございます。

それでは、時間限られていますので、第39回FDフォーラムのほうを進めていきたいと思います。今学長のほうからお話ありましたけれども、今日の講演テーマは「大学授業設計の点検ワークシートで担当授業を棚卸する」ということでありまして、講師の先生、こちら先ほど学長のほうから紹介いただきましたけれども、武蔵野大学教授、熊本大学名誉教授の鈴木克明先生をお迎えしております。鈴木先生は、インストラクショナルデザインの第一人者でありまして、前回9月にFDフォーラムをやったわけですけど、荒木先生講演いただいたんですが、その荒木先生が熊本大学の大学院時代の恩師の先生でもあります。

そうしましたら、早速ですけども、鈴木先生、よろしくお願いします。

**鈴木講師** 皆さん、こんにちは。学長先生、過分なるご紹介ありがとうございます。そして、越水先生、この機会をいただきましてありがとうございます。画面共有します。

これがお手元にあらかじめ配付させていただいているワークブックの表紙でございます。2015年って書いていますけど、教育工学会で学会として開発して、大学の先生向けの研修会をやった、この設計は僕がやったんですけど、そのときのものです。それ以来10年間、バージョン4の最新版なんですけど、それを事前にお配りしていました。それで、これは1日のワークショップでスタートしたんですけど、あらかじめ事前にいろいろやってきてもらうことによって半日に圧縮してという経緯があります。この中で、あらかじめ書いてきてくださいねといって、参加者にこのフォーマットをお渡して、これを書いてきていただくということでこのワークショップが始まったということです。これも一つの私どもの主張というか集まる前に準備をしてもらって、集まってからは集まったときにしかできないものをやろうじゃないかという、そういう趣旨です。そのことによって集合時間、実際に集まっている時間を少なくデザインしようという、そういう意図が込められたものでございます。

これは、大変多岐にわたってございまして、これを全部カバーするなんていうことは、とてもじゃないけどできないので、今日は事前に14人の先生方、記入していただいたワークシートを提出いただいています。記入をしたけど提出していないという方々もいらっしゃるかもしれないし、まだこれから記入されるという方もいらっしゃるかもしれないという前提で、どの段階にある人たちも置きっぱなしにしないような時間にしたいというのが私の願いです。それで、最終的に狙っているのは、このワークシートがいわゆるインストラクショナルデザインの教育工学的な観点で授業を棚卸するときの見方を示しているわけです。その見方でご自身が担当している授業を棚卸してくるとい

うのが事前課題あるいはこれからやっていただく方もいらっしゃるかもしれない。それを一回記入したら、ぜひ見せ合いっこしてもらいたいです。

今日は見せ合いをするというワークは時間がないのでできませんので、この私の担当の時間は既に記入されている方がどんなことを記入されてきたかを二、三紹介させていただいて、これをまないたの上のコイ方式というんですけど、僕が勝手に名前つけたんですけど、要するにどなたかにまないたのにのっかってもらって、こういうふうに点検しましたが、どうでしょうかねということをみんなの前で料理しようという、まないたの上のコイ、こういう話です。当然のことながら一番バッターは越水先生に決まっているわけです。もしほかにもご希望があれば、俺のもやってくれという、私もやってくれということあればやりたいと思います。それで、その後チャットをオープンにしておきますので、いつでも何か聞きたいことがあったら書いておいていただいて、まないたにのるコイが品切れになったところで質問に答えるという時間を後半取りたいと思います。

僕は、プロフェッショナルな専門家の役割はQ & Aのフィードバックにあるというふうに思っていて、それ以外のことは多分ほかのやり方でもできるんだけど、こうやって皆さんに時間を共有して集まっていただいて、やるべきことは何かということを考えると、やっぱり質問に答えることだろうということです。質問に答えるためには、当然のことながら質問を持つ、疑問を持つ時間が必要であって、それがこの大学授業設計の点検ワークシートに記入していただいている体験になります。当然その前にご自身で授業やっているという体験があるわけで、だからこそ棚卸ができるわけですが、まだ書いてない人は「人のふり見て我がふり直せ」じゃないですけど、こういうふうに書くんだなということを二、三見ていただいて、あるいは見ながらご自身のやつを各自書き進めながら、あるいはもう既に書いて提出した方はそれをもっとこういうことも書いたほうがよかったかなと思えば加筆なりしながら、作業しながら聞いていただいて全然問題ございませんので、そんな格好で進めていきたいと思います。

僕の願いは、今日の90分終わったら、じゃこれを見せ合いっこしましょうかという会を、それぞれの専攻じゃないか、この大学院はコースか、3つコースがあるということでやっていますが、そのコースの中でより小さい集まりで集まって、こういうふうに書いたんだけどどうでしょうねというようなことをみんなが共有するような時間を持っていただいて、それでもってご自身の授業と関連している授業がちょっと風通しがよくなればいいかなというのが僕の願っていることでございます。というわけで、以上が前振りなんですけど、それで早速ですけど、越水先生のやつ映していいですか。

**越水教授** お願いします。まないたの上のコイ第1号で今スタンバっております。よろしくお願いします。

**鈴木講師** では、これですね。それで、別画面の共有……

**越水教授** ちなみに、自分は担当している授業、品質工学特論というのが、この第4クォーターに終わったばかりでありまして、記憶も新鮮ということで取り上げました。鈴木先生、お手柔らかによろし

くお願いします。

鈴木講師 じゃ、行きましょう。

まず、出入口ですが、科目が品質工学特論、4Qというのは4クォーターということですね。

越水教授 第4クォーター。

鈴木講師 社会人学生を対象として品質工学、タグチメソッドの手法を教えている。何のことだか私には分かりませんが、そういうことを教えていらっしゃる。技術開発や製品設計などの実務で役立つ手法だと、受講者は20人、同科目の担当者はこれ「いる」で合っているのですか。

越水教授 ごめんなさい、いません、越水一人で担当しています。

鈴木講師 いないですね、一人ですね、分かりました。

次が、その出入口は何ですかという質問なんですけど、なぜかと問われても困りますよね。

越水教授 いや、もう既にカリキュラムに組み込まれているので、そういう感じですけども。

鈴木講師 ですよ。しかも、前提科目も後続科目もないんですか、この科目は。

越水教授 そうですね。品質とか信頼性とか、大きな意味での品質という概念があるんですけど、第2クォーターって第2学期に信頼性工学特論というのを担当しているんですけど、同じジャンルなんですけど、その前に学習すべき科目かということ、前提科目というかということそうでもないですね。

鈴木講師 なるほど、でも関連はあるんですね。

越水教授 関連はあります。

鈴木講師 なるほど、そうするといわゆるカリキュラム上の前提科目とか後続科目ではないかもしれないけれど、どの科目とつながっているのかなという意味を含めて書いてもいいかもしれないですね、ここは。

越水教授 そうですね、その今言った第2クォーターの信頼性工学特論を受講しないと、この品質工学特論を受講できないかということ、そうにはなっていないんですけど、一応同じジャンルの科目ということで書いたほうがいいのかもしいかなもしれないです、前提科目。後続科目はないですね。

鈴木講師 ないんですね、あえて言えば2年のPBLとか、そういう性質という形ですかね。

越水教授 そうです。本学の場合は、1年次に学んだ知識とかスキル使って2年次のPBLやるという、そういう教育プログラムなので、PBLとかで使うという場面はあったりします。

鈴木講師 そうですね。なぜここで、それはなぜかと問うているのかということ、まずは前後関係ですよ。学生にとってみれば、この科目をやる前に関係するもので何を習ってきているのかなと、それからこの科目が終わった後で、この科目で学んだ内容を応用するところの位置づけになる科目はどれかなとかということを考えてみるというのが、この出入口というのの一つの捉え方ですね。要するに、この科目の入口、出口があるわけなんですけど、この科目の入口の前にはほかの科目の出口があって、それでこの科目の出口の次には、ほかの科目の入口があるって、連結されているというふうに考えると、少なくとも前後の科目の先生たちと、うちではこういうことやっているんだけど、あんたは

それでいいとかいうようなことは話し合っておく必要があるのかなとは思っています。

**越水教授** なるほど、分かりました。

**鈴木講師** もう一つは、それはなぜかというのがいわゆる学生にとってカリキュラムにあるからというのはいさぐさ積極的じゃなくて、これを学ぶと何がよいことあるんですかというような意味で、やはり学ぶ意義みたいなところを押さえておくというのが大事かなと思うのです。

**越水教授** なるほど。

**鈴木講師** これは動機づけモデルにアークスモデルというのがあって、ハンドブックにご紹介していますけど、そのARCSで分けるとすればレバンスの問題なんですね。何でこれやらなきゃいけないんですかという、特に必修科目だとそれを割と説明しないで、とにかく必修なんだからやれというふうに言うと、学生に取ってみればやっぱり何でやるのかなというのがあると、疑問に思いますよね。科目担当の先生方には全然疑問ではないんですけど、それは自分の専門だからであって、新しく学ぶ人間にとってどうなのかなというふうに、そういう目線で考えるという意味も込められていますね。

**越水教授** なるほど、確かになぜ学ばなければならないとか、前後の科目の関連性とか接続とかあまり考えていなかったですね、ありがとうございます。

**鈴木講師** 割と無頓着な場合が多いですよ。という意味で、これを質問して、これに答えてもらうという意図がそこにあります。

**越水教授** なるほど、分かりました。

**鈴木講師** じゃ、次に授業方法ですが、どうやって教えているかで、またそれはなぜかなんですけど、まず授業方法、毎回の授業でどんな格好で教えていますかということで整理していただいていますと、これはまず1の講義があって、2の事例紹介があって、実務への応用例、面白い例、課題を提示して事例をつくって、これが宿題なのですかね。1人5分で発表というのが、これは次の時間にやるみたいな感じですかね。

**越水教授** 先生、この1から5が大体5コマでやるので、①、②、③それぞれ1コマという、そういうイメージです。

**鈴木講師** なるほど。

**越水教授** 品質工学特論、全15回の講義なんですけど、大きく3つのモジュールを教えるような内容になっていて、平均すると1つのモジュール5回で授業をやっているんですけど、それが大体この①から⑤の流れ、講義（理論、数理）教えて事例紹介して課題、今回のこれは事例つくってきってもらって、最後発表会やるんですけど、課題提示して事例つくってもらう、事例つくってもらうのは授業の中じゃなくて宿題でやります。最後、事例発表会と称して授業の中で2コマに分けて、20人だと1人5分で発表しても2コマぐらいかかってしまうので、事例発表会を最後2回の授業でやるという、そういうおおよその流れであります。

鈴木講師 なるほど、非常に分かりやすいですね。そうすると、ここに事例作成は各自の宿題と書いてあるから、あと1、2、3を1コマずつで、5が2コマ使ってやっていますみたいな感じね。

越水教授 そんな流れです。

鈴木講師 そうしておいてもらおうと、さらに分かりやすくなりますね。ありがとうございます。

次に書いているのは何ですか、これ。

越水教授 次の授業ルーチン、毎回の授業でやること、決まり事というのが各授業でやる代表的な90分間の授業の流れであります。

鈴木講師 なるほど、そうすると前回の振り返りをして、新しい内容の講義して質問して、次の講義、次の部分、そしてディスカッション、なるほど、まとめ、質疑応答、ミニレポート・オア・オンラインテスト、飽きさせない感じになっていますね。

越水教授 そうですね、本学の場合ハイフレックスって言ってオンラインでも授業を受けれますし、あとこちらの教室に来て受講もできるんですけど、圧倒的にオンラインで受講する方が多いので、大学の教室来ていただいている学生さんも、ズームならズーム、ミートならミートのオンラインに入っていただいて授業をやるというのがもう定番になっちゃっているんですよね。一方によく言われているのが、オンラインはちょっと集中力が続かないと言われているので、大体15分に1回ぐらい受講者の態度を変えてもらおうというんですか、そんなことでちょっと細かく講義したりディスカッションしたりしております。

鈴木講師 なるほど、それでFDも同じやり方ですねということで、なるほど分かります。

越水教授 ちょっと受け売りを、そのままやっている感じがあるんですけど、15分ぐらいで受講者の態度を変えるみたいな、そんなことを心がけています。

鈴木講師 じゃ、次にそういうやり方でやっている理由は、今ちょっと一応ご説明いただいたけど、ハイフレックスでオンラインが主だということもあると思いますが、知識を伝授し、実務への応用をイメージしてつくってみて、発表して気づきを得ると、いい感じですよ。

越水教授 ありがとうございます。

鈴木講師 講義形式をやめる可能性あるかもということで、あるかもだけど、今でも一部しか講義はしていないみたいですね。だけど、ここに講義をビデオ教材でまとめて視聴してもらう方法あるかもということで、これはありますね。いわゆるオンラインでもリアルタイムとオンデマンドがあるじゃないですか、割とオンデマンドの使い方というのが僕は鍵を握っているような気がして、あんまりそれをやっちゃうと宿題が多くて大変になるんですけど、少なくともみんな集まって講義を聞きましょうという講義じゃなくても、あらかじめ録画したやつであれば来年も使えるかなぐらいの印象はありますよね。あとは朝やりたい人は朝できるし、夜な夜な見たい人は夜な夜な見ればいいし、いずれ授業の時間割のときに集まってくるまでに見ておいてくださいます的なやつですよ。それはあり得る話ですね。

越水教授 先生、ちょっと質問なんですけど。

鈴木講師 どうぞどうぞ。

越水教授 全15回の授業でオンデマンドの教材というかオンデマンドの授業回を入れようとするとか何回ぐらいが適当とかあるんですか。

鈴木講師 それは中身にもよりますし、でもこれでいくと①のところとか②のところとかはオンデマンドできそうですね。

越水教授 そうですね。

鈴木講師 あとは、事例作成は自分でやるから、ある意味自分の時間でやって期日までに提出でしょう。そうすると、次の事例発表会は多分みんなで集まってやったほうがいいかなとは思いますが、場合によってはこれもあらかじめ何か提出させておいて、見てコメントするなんていうのもオンデマンドでできないことはないですよ、掲示版か何か使えば。

越水教授 なるほど、ちょっと自分だけかもしれないんですけど、オンデマンドでやると何か罪悪感みたいのがあって、一回ビデオつくると結構効率よく毎年使えたりするじゃないですか。

鈴木講師 それは放送大学では5年使いますから、それがスタンダードで逆に今年こういうことありましたとかいうのは言うてはいけないという決まりがあって、2026年と言わないと来年は使えませんかみたいながあるんですけど、でもそれは三、四年使い回すということを前提につくっていますよね。

越水教授 なるほど、分かりました。まあまあ、そうですね、オンデマンドの教材もそうですね、そうやって数年たったらバージョンアップしていけばいいということですよ。

鈴木講師 そうですね。

越水教授 毎年同じだとちょっと何か……

鈴木講師 それは伝統的な講義でも同じじゃないですか、講義ノートを黄色くなるまで同じやつを、事例紹介なんかだと新しい面白い例があったらそれをどんどん差し替えていくというようなことも必要かもしれませんが、基本的に変わらないところは教科書も変わらないだろうし、それは1回しゃべれば5年、10年使ってもいいんじゃないのって気がしますよね。

越水教授 分かりました、ありがとうございます。

鈴木講師 ありがとうございます。

次が評価です。これは出口の評価のところなんですけど、単位の取得、そしてそれが目標と合致していますかという項目ですね。ミニレポートとオンラインテスト、演習に対する発表、最終レポート、最終試験はやっていないと、いいですね。最終試験は、できるだけやめれる場合はやめたほうがいいと僕は思っていますし。

越水教授 そうですか。

鈴木講師 やめられない場合は配点を低くするということを推奨しているんですけど、これ最終試験

だけに頼っていると結局そのときしか勉強しない人になっちゃうから、教員側にとってはもう試験の採点が一番大変なので、できるだけ少なくしたいというのはよく分かるんですけど、オンラインテストとかをうまく使えば割と客観テストで基礎的なものは割と頻繁にテストすることがも最近安くなりましたし、AMFなんかにつけておけば誰がどのぐらいやったかとかいうことで記録に残りますし、これをつくるのは大変だけど、一回つくってしまえば結構使い回しができていいですよ。省力化を考えないと、教員も忙しいので。

**越水教授** そうですね。

**鈴木講師** 手抜くところは手抜いて、しかしフィードバックはきちんとやるとか、そういうめり張りつけていかないとねということです。

**越水教授** なるほど、そうですね。さっき省力化という言葉ありましたけど、そこにちょっと罪悪感みたいのがあって、どうしても教えちゃうほうに行っちゃうんですけど、そこはうまくやるということで。

あと、先生、最終テストしないというのは、さっき言われた最終テストやると、そのときだけしか対策で勉強してこない学生が出るからって、そういう理解で合っていますか。

**鈴木講師** はい。あと、最終テストで例えば90分しかないところで何が評価できるんですかということです。評価の浅さとか幅の狭さとか、山をかけてしまいがちだとか、様々なまずい点がありますし、それから学生にしてみると試験期間中に全部やるというのは勘弁してくれよという感じですから、それよりは前倒し、前倒しでなるべく早いうちに部分的でもテストなりレポートなりで確認して、だめだったらそこでやり直しの機会があってとか、最後に行くときにはもう大体この科目は単位が取れるよねという安心感があつたほうが僕はいいんじゃないかと、そういうところが通年勉強してもらえんじゃないかというふうに思います。

**越水教授** なるほど、分かりました。

**鈴木講師** この到達目標的には、テストと合致しているんじゃないかということですね、そんな感じに見えますね。

越水先生のレポートで僕は一番気になったのが、続けたい点は何かというところと変えたい点は何かというところを書いてないということなんです。

**越水教授** なるほど。

**鈴木講師** 一部書いていましたね、講義をビデオ教材にまとめてもらえたらみたい。

**越水教授** いや、この欄はFDフォーラム当日に記入って書いてあつたので、今日書くのかなと思ってたんですけど。

**鈴木講師** これはこういうふうに書いてました。そうでしたっけ。

**越水教授** ああ、そうか、自分が書いたんだ、これ。

**鈴木講師** 多分そうですね。もともとのやつには書いてないですよ。

越水教授　そうですか、すみません。何かこのサブテキスト読んだときに、ずっと何か続けたい点、変えたい点は講習会の当日、研修会の当日に書くものだとちょっと思い込んでいました。すみません。

鈴木講師　いや、いいんですけど。

越水教授　変えたい点は、今言っていたいただいた知識を伝授するような回は効率よくオンデマンドでビデオ教材つくる、それも数年でももちろん事例とか最新事例入れてバージョンアップしていくんですけど、そんなのがいいのと、あと前後の科目との連結をもうちょっと考えて授業設計したほうがいいかなと思いました。

鈴木講師　じゃ、ありがとうございます。そうですね、教育を工学的に見るといってんでもない学問なものですから、私やっているのは。効率化はとにかくしないと忙しくてやっていられないという考え方なんで、教育をそもそも工学するというのがおかしいんじゃないかって、教育学の人には怒られるんですけど、でも手抜かないとやっていられないよねというふうに思うので、でも手抜いてもちゃんと成果は出さなきゃいけないでしょうとなると、どこは省略できて、どこはもうちょっと注力すべきかということを考えていくというのは、やっぱり大事なことなんじゃないかなと。

越水教授　なるほど、確かに教育はどこまでもやろうと思えばできちゃうので。

鈴木講師　そうなんですよ。

越水教授　あるところでちょっと踏ん切りが必要かもしれないですね。ありがとうございます。

鈴木講師　そうですね、ありがとうございます。てな具合にやりますということなんですけど。

越水教授　皆さん、これは別に鈴木先生と事前に打ち合わせして、今やり取りしているわけじゃなくて、今本当に生で即興でまないたの上のコイを料理していただきました。ありがとうございます。

鈴木講師　そうなんですよ、これは。というわけで、30分ぐらいたったんですね。

質問があつたら質問も書いてくださいねって言っている割には、多分越水先生とのやり取りが面白くて、それどころじゃなかったのかもしれませんが。

越水教授　何か質問ある方いらっしゃいます、ここまで。いましたら、挙手していただいて、お願いしたいんですけど、大丈夫ですかね。

先生、どうでしょう、次の。

鈴木講師　次、どなたかボランティアがいれば、もう一回ぐらいますか。

越水教授　今参加者をちょっと見ていたんですけど、若手の先生がいいかなと思って。こういうのに動じない先生、中内先生、どうですか、できそうですか。

中内助教　ちょっと僭越ですが、大丈夫です。

越水教授　大丈夫ですか。じゃ、中内先生。

鈴木講師　中内先生、これかな。

越水教授　それです。最新のLLM、大規模言語モデルをお教えする内容かと思います。

鈴木講師　じゃ、中内先生、ひとつお付き合いください。

中内助教　お願いします。

鈴木講師　産業技術特別講義2というやつですね、大規模言語モデルの実装技術未経験のエンジニア層、これはターゲットががんがん動く分野で大変ですね。

中内助教　そうですね。

鈴木講師　しかも67人もいるんですか。

中内助教　ちょっと多めです。それを前提とした設計にならざるを得ないところがあるかなというところでは。

鈴木講師　これは、何でこんなに多いんですか。

中内助教　そうですね、一応3つのコースの在籍者全員受けれるようになっているというところが一つあるのと、あとやっぱりエンジニアの方で最近生成AIがすごくよく使われるようになっているというところで、ちょっとそれは学びたいと思われる方は、やっぱり多い傾向があるのかなと思っています。

鈴木講師　それは、もう避けては通れないものですね。同科目の担当者がいらっしゃるということで、何人かで教えていらっしゃるんですか、この科目。

中内助教　すみません、これはちょっと間違えました。私1人で教えている状況です。

鈴木講師　67人一緒に1クラスで1回でやるということですよ。

中内助教　そうですね、一応ハイフレックス制でやるのが推奨というところで、録画視聴でもいいですし遠隔視聴でもいいですし、教室に来てもいいという形です。

鈴木講師　なるほど、これだけの人数だとちょっとグループワークやるにも大変だし、割とインプット中心になりがちですね、この人数は。

その理由ですけれども、前提科目はあると、システム・ソフトウェア特論というのをやってから来るということですかね。

中内助教　そうですね、ここからダイレクトに前提知識というわけではないんですけども、本当に基礎の基礎として求めているところです。ただ、一方でこの科目を前提としている部分以上に社会人大学院として一定の実務経験を経た上で入学して来るという前提があるので、そこでエンジニアとしての業務経験はあるということを前提としている部分が大きいです。

鈴木講師　さっきの学長の話もあったように、もうLLM使わない仕事がなくなってくると、社会人経験でもある程度やっている人がどんどん多くなりますよね、きっと。

中内助教　そうですね。

鈴木講師　そうすると、その人たちの既有知識をどうするかというのはかなり問題ですな、使わない人は全然使わないだろうし、使っている人はがんがん使っているという。

中内助教　そうですね、差が開くところですね。

鈴木講師　そうですね、その入口の状態がなかなか、今後そういう科目も場合はいわゆる落ちこぼ

しだけじゃなくて受けこぼしというか、もう知っているよ、こんなものはみたいな感じの人たちをどう対策するかというのは、かなり大きな課題になりそうですね。

**中内助教** そうですね、やっぱりちょっとそこはすごく大きいなと思っていて、やっぱり昨年度実施したときにガイダンスの段階で仮登録している受講者数すごく多かったんで、やっぱりガイダンスでどういうレベル感と前提と目的でやるのかというところは、ちょっと結構口酸っぱくアナウンスを心がけたところですよ。

**鈴木講師** なるほどね、ありがとうございます。

それで、次の授業方法は各回の出席確認の小テスト、出席確認小テストというのはどんなことをやっていらっしゃるんですか。

**中内助教** これは、各回の授業が終わった後で、学習支援システム上で授業時間外で、その日に受講した授業の内容を理解しているかどうかを問う選択式のウェブテストを設けていて、それ5問中半分以上の3問以上正解であれば出席として認めるというようなものを設けているんですけども、そこに質問フォームも設けて、そこから授業中に質問をしてくださる方もいっぱいいるので、そこでも受け付けているんですけど、そういうのが気後れする方もいるので、ここで受け付けていると、それを次の授業の冒頭ですするというところをルーチンでやっています。

**鈴木講師** なるほど、それはいい工夫ですね。要するに出席点だけじゃだめで、ちゃんと確実に学んでください、この程度はという分析を毎回確認されているということですよ。

**中内助教** そうですね。

**鈴木講師** なるほど。それで、2番としてハンズオン形式での実装、今度は各回が始まると解説及び講義形式での理論解説がありますということですね。これが結構長い感じですか。

**中内助教** そうですね、一応理屈を理解する講義部分と実際にプログラミングして手が動かせないと実装現場で活躍できないので、いかに手になじんでもらうかという部分があるので、ある程度理論解説、実装の班ゾーンというのを結構交互でやるような形にしているということです。

**鈴木講師** なるほど、そうやっている理由は受講者数が……録画併用やハイフレックスにより録画視聴、なるほど次のときまでに見ておけば、そこで同時に視聴していなくても質問はできますよということですね。

**中内助教** そうですね、そういう趣旨です。

**鈴木講師** 実装はプログラミング開発、イメージ……なるほどそういうことですね。このやり方はなかなか考えられてはいるんだけど、入口の実力の格差には対応しにくい感じですかね。

**中内助教** そうですね、ちょっとやっぱりそこは悩ましいところです。

**鈴木講師** 今まで講義の部分は、でも録画はされているんだから講義は残るという感じにはなっているわけですね。

**中内助教** そうですね、録画したものは残っているので、ちょっとそこは先ほどの効率化というお話

もあったので、何かこううまく使っていけるような形に、特に今年度はちょっと意識して仕上げていきたいかなと思っていますところ。

**鈴木講師** 多分お勧めは出席確認の小テストがあるじゃないですか、その小テストと、それから講義のあるパートを連結して、この講義を理解したら、この小テストに確実に答えられるというセットをつくりますと、だから録画の90分なら90分をもっと細かに分けて、1本目の講義とか2本目とかトピックスが多分変わってくるみたいな感じでもっと小分けにして、その小分けにしたごとに小テストをつくるというふうにすれば、最初に小テストを受けちゃうという手が使えるんですよ。

**中内助教** そうですね。確かに、ありがとうございます。

**鈴木講師** この小テストを分かる人間は、ここは見ないでいいというやり方ですね。

**中内助教** 確かに、すごくいいですね。

**鈴木講師** そうすると、ここは分かっているからいいやとか、分かっているけれどももう一回見たいとか、それは学生が自由にできるようになるんで、そういうテストと解説の部分を含みにしたセットをいっぱい用意するというやり方が何かいいんじゃないかなと思います。

**中内助教** そうですね、確かにそれは参考にしたいなと思います。ありがとうございます。

**鈴木講師** それから、次が評価方法、実際に制作して、なるほど、所定の基準を超えるというのは何かチェックリストみたいのがあるんですかね。

**中内助教** そうですね、ちょっと細かい評価基準はあらかじめ設けていまして、プロダクトの作成要領みたいなものも詳細につくっていて、ちょっとどういう観点で評価をするかということも学生に開示していて、前提基準を求める授業だということはかなり口酸っぱくアナウンスしてはいるものの、やっぱり67人もいると現実問題としては必要な前提知識がないんだけど、履修登録してしまったという学生もやっぱり含まれてくるので、サンプルのミニプロダクトというところは提示をしていて、そのミニプロダクトにこのぐらいプラスアルファぐらいの水準のものを出すと最低限単位が取れますということを示して、それを所定の基準として運用しています。

**鈴木講師** いいですね、チェック項目というか評価基準をあらかじめ開示しているというのはとてもいいですね。

**中内助教** ありがとうございます。

**鈴木講師** それをやっておかないと、どこまでやればいいのかがよく分からないので。

**中内助教** そうですね。

**鈴木講師** それが最終的にこの科目の目指すところであれば、試験はやる必要ないのでやっていないということになるわけですね。

**中内助教** そうですね、やっぱりもう何よりも実際に手が動かせるようになることが実質的な部分かなと思っています。

**鈴木講師** いいですね。それで、それが科目の目指すところと一致しているんだからよいという感じ

ですね。ここでは出口を、ある意味最低限のミニプロダクトを例示したやつにちょこちょこっとやるやつが最低限だとすれば、どこまでやるとさらに評価が上がるかということの基準を複数示すということはやっていらっしゃると思いますか。

**中内助教** そうですね、いろいろとちょっと例を示して、こういうことをやるとこの観点ではプラスアルファの評価になるというような形で複数示しています。

**鈴木講師** いいですね。そうすると、ある程度もう既にできる人はもっと上を目指せるし、最低限のところでひいひい言っている人は、とにかく最低限でも単位はもらえるという出口をマルチに設定しているというやり方ですね。

**中内助教** そうですね。

**鈴木講師** これが割と入口が多様な場合の大学の教員ができるせめてものことかなと思うんですよ。全員に同じところを要求しちゃうと、もう本当につまらないというやつが増えちゃうので、つまらない人間はもうこれもやれ、あれもやれ、こっちも目指せということを言ってあげて、だけどそれは単位取得の最低条件にはしないということでは恐らく吸収できないんですよ、この入口の差だと思います。とってもいいやり方だと思います。

**中内助教** ありがとうございます。

**鈴木講師** 最後の続けたい点は、自ら動かすことが必要だからということでもいいですね。

単純知識を問うタイプの課題も課したが、科目の……なるほどそうですね。単純知識というのは必要なものであれば、これぐらい知らないと実際に実装できないというのであれば、そういうことも必要になってくるんですけど、単純知識が答えられたから単位をやっちゃうってなるとちょっと問題だよなという感じですよ。

**中内助教** そうですね、これちょっとやっぱり実際やってみたところ、ここはみんなあまりにも難なく突破でき過ぎてしまったので、ちょっともう成績にげたを履くような形にもなってしまいましたし、プロダクトと併せて考察レポートも出させているので、そこで知識に関してはきちんと論述させることが十分できている実態になっているかなと思ひまして、ここは変えたい点かなと思ひました。

**鈴木講師** なるほど、いいですね。

さっき言っていたやつはテキストにあるかどうか、ちょっと別の資料をお示ししますが……こっちにもないか。TOTEモデルというのがあって、ご存じかな、これは見えていますか、小っちゃいけど。

**中内助教** 見えています。

**鈴木講師** テストして、オペレートしてテストして、オーケーだったらエグジットするというエアコンの動作原理と同じなんですけど、要するに温度を見ておいて、暑くなったら冷房を入れてみたいな、それで温度をもう一回見て涼しくなったら終わりみたいな、これを教育にも使うという考え方

はテストからやるという考え方で、さっきのこれは事前テストというんですけど、教える前、学ぶ前にまずテストを受けて、できたらもうやめるという感じです、合格で。テストで不合格の場合学んで、もう一回テストを受けて、今度は事後テストってなるんですけど、事後テストで合格しなければもう一回やって合格したら出るという、そういうテストで始めてテストで終わるみたいな考え方をやると、その入口の段階で全然差がある人たちがどこまでできているのかということ、まず診断してしまおうという考え方です。できなければ、学んでくださいということで、先ほど申し上げたテストと、それから動画の部分、これをセットにして考えると、テストをまず受けて、分かんなければ動画見ると、もう一回テスト受けて分かったらチェック、それで合格で次に行くという、その考え方がうまくできるんじゃないかなというのの根拠がこのTOTTEモデルというものです。

**中内助教** ありがとうございます。すごく参考になります。

**鈴木講師** これは、いわゆる一斉授業だと難しいんですよ。だけど、オンデマンドでやれば結構できる話なんで、だからオンデマンドで最後の応用的なもの、プロダクトをつくるみたいなところをやる前のものは、もうオンデマンドに全部しちゃうということはあると思うんですよ。それをあらかじめやめて、できるやつはとにかくテストだけ受けて合格しておけばいいから、講義なんか見ないでいいからみたいな感じで、どこまでできるかやってみてくださいみたいにやると、結構学生がどこまでできるようになったかを見てフィードバックするという時間が取れるようになるんじゃないかなというふうに思います。

**中内助教** そうですね、確かに。ありがとうございます。

**鈴木講師** 一つのアイデアなので。

**中内助教** とても参考になります。

**鈴木講師** オンデマンドのオンラインとリアルタイムのオンラインをどうやって使い分けるかということ、すごく大事なんです。

**中内助教** そうですね、確かに。

**鈴木講師** それについてはどこかにあったな……資料が多過ぎてちょっと、何か質問とかあれば随時書くなり言うなりしてくださいね。

**越水教授** そうですね、皆さん、質問がありましたらチャットのほうにをお願いします。

**鈴木講師** ここに用意しておいた資料が何で見つからないんですかね、嫌になっちゃうね。これはさっきのやつだ、さっきのやつが今頃見つかったんだけど、これですね、TOTTEモデルって、テストしてオペレートして、テストして出ていくというやつ、こういう考え方を101個の道具を集めたのが「インストラクショナルデザインの道具箱101」という本になっているんですけど、そのIDのインストラクショナルデザインの道具のうちの一つですね、TOTTEモデル。

**中内助教** 確かに入口でテストをするという発想は持っていなかったもので、参考になります。

**鈴木講師** 大体評価というと最後にやるというふうにみんな思うんだけど、そうすると結局最後の最

後だから最終試験になっちゃうんですよ。

中内助教 そうですね。

鈴木講師 それよりは、できるだけ前倒しで、さっきの越水先生のやつだったら3ブロックになっていけばもうブロックごとにチェックして、テストでもレポートでも評価して、それを積み重ねていくってなると、最後のレポートというのは3分の1のカバーで済むので、そのほうがお互いに楽だよねという発想なんですよ。

中内助教 そうですね、確かに。

鈴木講師 でも、それやるのが大変なんで、みんなあまりやらないんですけど、とにかく20人ですら大変ですから、フィードバックを。

中内助教 そうですね、確かにやってみると大変だなと思います。

鈴木講師 何かあとは……ありました、ここに。ここにあったのはこれです。これは、割とコロナでみんなオンラインになったじゃないですか。それはそれでいいんですけど、オンラインといっても結局同期型のいわゆるリアルタイムのオンラインなんですよ、みんな。そこはほとんど対面の今までの授業と同じなんです。リアルタイム型のオンライン教育というのは、結局のところ対面でやっていたやつをオンラインでも受けられるようにしましたという、その違いしかないんですが、この授業の中でやるというものと、本来組み合わせるべきものはこの授業の外の活動ですよ、いわゆる宿題の部分ですね。そうすると、宿題の部分でオンデマンド型のオンライン教育とか資料配付型は駄目だとか言われましたけど、コロナのとき。

だけど、そういう教員がリードする学習ではなく、授業の外で各自が勉強する、各自が都合のいいときにというものが、むしろこの部分、授業の外の部分をどういうふうに組み合わせていくかということを考えないと、今までと同じになっちゃうんじゃないのというのが僕の危惧でして、ハイフレックスが結局時を同じにしているという意味では同期型なんですけど、今度は録画が見れるというところで非同期型、オンデマンドの要素がここで組み合わさっているという感じですよ。だから、録画するということはすごく大事なんですよ。そうすると、いつでも見られるし、分かんないところは繰り返し見ることができるしということです。それをする、うまく組み合わせて録画したんだから、今度は授業の外でできるでしょうという話にすれば、それを同期型のいわゆるペースメーカー的な週に1回の授業とどういうふうに組み合わせていくかということを考えるというのが、これから大事なんじゃないかなというふうに常々思っていますと。

これは、2021年にN I Iがオンライン教育どうするんだという毎週金曜日にシンポジウムやっていたんですけど、そのときの僕は2回登壇したんですけど、2回目の登壇で言ったことなんですけど、これはコロナが明けた後どうするんだ的なものだったんですけど、そのときにいわゆるブレンド型というのは何と何をブレンドするんですかということを考えるのが今後の授業の、せっかくこうやってオンラインに慣れたんで、オンデマンド型をどうやって入れていくかということ考えた

ほうがいいんじゃないですかということをしたという、これも今後の御校の場合は大学院ですから、それほど一番下を書いてある学生に育てるといような観点はあまり重要じゃないかもしれませんが、とにかくぼおっとして何もやらない人たちがどうするかということを考えるのが今学部では求められていて、一定程度大学院でもあるのかもしれませんが、とにかく自立的に、主体的に学習を進めてもらうということをやらないと、ぼおっとした人間がぼおっとしたまま出ていくという、それこそ高校4年生が高校5年生、高校6年生ってなって、学生にならないで出ていっちゃいますよということをよく言うんですけど、そういうところはもう経てから大学院に入られるんでしょうから大丈夫だと思うんですけど。

とにかく大学院であっても、僕も武蔵野大学に来る前は熊本大学のここに書いていますけど、熊本大学の大学院でやっていたんですけど、フルオンラインで一回も会わないという大学院だったんですけど、もうほとんどオンデマンドでやっているんです。オンデマンドで、要するにグループワークとかはズームとかチャットとかでやっていましたけど、そういうグループワークはやるとしても全部掲示板に報告させるというやり方で、何か要するに教員のコメントも掲示板、それから学生のレポート提出も掲示板、掲示板にすると全員のやつが見れちゃうんで刺激にもなる。掲示板を使ってお互いにレポートを書いたやつを点検してチェックリストをあらかじめ提供しておいて、このチェックリストでチェックして直したやつを出してください、教員にみたいな感じで掲示板をとにかく多用して、掲示板というのは非同期ですからオンデマンドでいつでもできますよね。期日さえ切って、この日までにやってくださいということでやれば、非同期が十分に成立するというのはもう18年やってきて分かっていることなんですけど、とにかく授業の時間に集まるということすらなかなかしにくい人たちが集まってきていたんで、本当に非同期は助かったというふうに言っていましたけど、なるべく同期型を減らして非同期で、要するに自分の好きな時間に進むことができる、好きなだけ進めることができるということをあえてとっても意識してつくったのが熊本大学のやり方でした。

**中内助教** ありがとうございます。確かに非同期型の部分ちょっと充実のさせ方いろいろ工夫の余地あるなと思いました。ありがとうございます。

**鈴木講師** てなことで、何か質問ありますか。

**越水教授** 中内先生、突然の指名にもかかわらず、ご対応ありがとうございました。

**中内助教** ありがとうございます。

**越水教授** 何か中内先生から、逆に質問とか聞いておきたいこととかあったりしますか。

**中内助教** そうですね、まさにちょっと非同期型の部分どういうふうに充実しようかなというのは思っていたところだったんで、今ちょっと聞くことができました。やっぱり67人もいると、それぞれモチベーション、受講者の方違いますし、全員同じ内容じゃなくてもいいのかなってやっぱりちょっと思っていたところで、15回の早い段階で最終レポートの課題も提示していて、それぞれの問題意

識持ってもらって授業を受けてもらうという形を取れば理想かなと思っていたところだったので、そのオンデマンドの部分とか配付教材の部分ちょっとある程度選択肢を提示できるような形にすると、もっと興味持ってもらえるのかなと思ったところです。すみません、ちょっと感想みたいな形なんですけど。

**越水教授** いえいえ、ありがとうございます。確かに本学、社会人対象の専門職大学院なので、非同期をうまく使うというのが一つヒントとしてありそうだと越水も思いました。鈴木先生、ありがとうございました。

**中内助教** ありがとうございます。

**鈴木講師** 専門職大学院と熊大の場合は専門職ではなかったのですが、やっぱり高度専門職業人育成という旗印、掲げている旗印は同じなんで、どうやって実務に生かす内容を与えるかということずっと苦心してやってきたわけなんですけど、本当に忙しいんですよ、社会人だから、この頃大学院も現職で働きながら通われているという方は多いんですよね。

**越水教授** そうですね、8割方多分働きながら通われていると思います。

**鈴木講師** だから、すごく似ているんです、うちの教えている内容は全く違うんですけど、ですから何か参考になるかなとは思いますが。ちなみに、うちの大学院をどういうふうにつくったかというのは、まとめた論文が1個あるんで今チャットに書きましたが。

**越水教授** 今チャットのほうに入力いただきました。ありがとうございます。

**鈴木講師** 少しは参考になるかもしれないですね。特にすごく何か似ていると思うのは、コンピテンシーをしっかりと決めてやっているということとか、シラバスガイドラインというのが僕らのこの大学院で提供する科目の共通的に要求仕様ですね、いわゆる科目ごとの。こういうことでやりましょうというふうに合意をしてつくってあるものですから、1番は双方向性を持った学習記録を残せというのは、これ文科省の要求事項なんですけど、2番が複数のレポート作品の組み合わせでやってくれと、だからテストはしないってどこかに書いてあったかな、というようなことを決めて要するにレポート、大学院なんだからテストというよりはレポートでしょうという感じで、コンピテンシー掲げているんだから当然それと全部直結させないと駄目だしとか、そんなようなことを話し合っただけつくったときはなかなか面白かったですよ、もう20年前ですけど。何か参考になればと思います。

**越水教授** ありがとうございます。

先生、どうでしょう、もう一人ぐらいいけそうな時間がありますか。

**鈴木講師** 簡単にいきますか、それとも質問を受けてもいいし。

**越水教授** そうですね、何かここまでで質問ある方いらっしゃいましたらお願いします。挙手いただいて質問いただいて結構でありますけれども。もし質問ないようでしたら、棚卸の事例をもう一件ぐらいいってみたいかと思うんですけど、先生、よろしいですか。

鈴木講師 いいですよ。

越水教授 本学、専門職大学院なんですけど、法律で決まっているのが実務家教員というのがある割合でいまして、研究者型の教員、ずっと大学で研究してきて大学教員になる先生もいらっしゃるんですけど、企業でずっと実務をやられてきて突然大学教員になるという先生もいらっしゃるって、実務家教員の先生の事例をやってみようかなと思うんですけど、どうでしょう、現在参加されている先生で、浪岡先生とかいかがですか。これも突然の指名なんですけど、大丈夫そうですか。

浪岡教授 どういたしましょうか。

越水教授 じゃ、鈴木先生、浪岡先生の事例、もしよろしければ、ちょっと時間が短めになってしまうかもしれないんですけど、お願いできればと思うんですけど。

鈴木講師 映していいですか。

越水教授 お願いします。

鈴木講師 ありがとうございます。データマネジメント特論、20人、いいですね、20人ぐらいがありがたい。前提科目がいろいろあって、後続科目はないのか。初回以外で業界・研究分野、なるほど。企画提案……14分野を3つの分野グループに分けて企画書を書く、いいですね、3件のレポートの総合点、最終試験はやる可能性はまずないと書いていらっしゃるけど、でもやっていたらいいんですけど、試験は。

浪岡教授 いえ、試験はやらずに3つのレポートで決めております。

鈴木講師 いいですね。多分こういうやり方は学生にとってもありがたいですよ。

浪岡教授 恐縮です。

鈴木講師 1コマ1分野で展開するとどうしても時間が足りなくなり……なるほどそうですね。これは痛しかゆしで、長方形の面積じゃないけど、深めようと思うと幅が少なくなるし、広くやろうと思うとどうしても浅くなりますよね。

浪岡教授 そうですね。

鈴木講師 でも、3分野、これは3つの分野グループというんだから、ある程度共通点があるような3つのグループに分けることはできるということだからね。

浪岡教授 大分違う分野を選んでおまして、14分野の中から最終的に合計3分野を選んでレポートにさせていただくという方法を取っております。

鈴木講師 そうかそうか、14から3を選ぶということなんですね、なるほど。

浪岡教授 一応最初から何分野目だったかが1分野グループで、次のグループが2分野で、最後の何回目だと3つの分野というふうに分けさせていただいて、それぞれの中から1つずつ選ぶというような方式にさせていただいております。

鈴木講師 なるほど、それは学生が自分の興味に合わせて3つを選択するみたいな感じですか。

浪岡教授 はい、14分野は製造業からサービス業から研究分野までいろいろつままさせていただいて、

こちらが提示しているものになります。

鈴木講師 なるほど、割と横幅広目に先生のほうで説明をして、その中から3つをピックアップして自分の関心に応じてレポートを書くという感じですね。

浪岡教授 そうですね。ただ、14回全部一旦は自分なりの考えをもって受講していただくということをしております。

鈴木講師 それはいいんじゃないですかね、そのやり方は。でも、問題は1コマ1分野で展開するとどうしても時間が足りなくなるんだと、ある分野に例えば製造業なら製造業に2時間使うということしかなくなっちゃいますよね。

浪岡教授 そうですね。

鈴木講師 そうすると、今度はカバレッジが狭くなってしまうという、これも痛しかゆしだな、どっちがいいかは先生がご判断するしかないと思いますけど。できれば、この分野ごとに似てる分野を一固まりにして、何とか業界みたいな感じになればさらにいいんだろうけど、うまくはいかないんだよね、きっと。

浪岡教授 そうですね。シラバスにもう出しちゃっているので、減らすというわけにもいかずというのもありまして。

鈴木講師 確かにそうですね。

浪岡教授 2か年計画でやらないと整理できないといいますか。

鈴木講師 そうですね。シラバスもある程度書きようがというのがあって、この分野がリストされていて、その中から幾つを選んでやるとかって書いておけば、その年に応じて選ぶやつが変わっても大丈夫だみたいな書き方が許されればいいけどね。

浪岡教授 そうですね、ちょっと考えてみます。

鈴木講師 これで特に問題はないというか、何しろ実務家の先生の強みはいろいろ現場をご存じだということだから、この現場はこうだよということを踏まえて紹介するというのがアカデミアにずっといた人にはなかなかしにくいことなんで、そういう長所とかうまく生かされる授業になっているんじゃないかと思いますけどね。

浪岡教授 恐縮です。

鈴木講師 何かお困りのことはありますか。

浪岡教授 はい、先ほどの広くやるか深くやるかのところのさじ加減をどうしようかなというのがちょっと悩んでおります。あとは、生成AIの機能が上がってくるたびに学生のレポートのレベルが上がってきております。去年のレポートに比べますと、今年のレポートが格段に質が上がっておりまして、何か聞いた感じですと生成AIと壁打ちをしてだんだん、だんだん内容を濃くして、それしてから提出しているらしくて、それを私はとがめる気は全くございませんで、総合力でいいもの出してくれれば、それでいいよというふうなスタンスではおりますけど、差が出にくくなってまいり

まして、全員高得点になってきますと、ちょっといろいろ学内では最後高得点ばかりになった理由を書かなきゃいけなくて、そこはちょっと何て書こうかなと悩んでおります。

鈴木講師 でも、レポートの質が上がったんだったら、それは高得点を上げてしかるべきですね。

浪岡教授 はい。

鈴木講師 あとは、一般的なルールとしてももちろん生成A I 使うなというのは馬鹿げているとは思いますが、じゃ使ったということをどういうふうにレポートの中に書くのかというのは難しいよね。

浪岡教授 そうですね、あえて書かなくても何となく分かるといえば分かりますので。

鈴木講師 分かるといえば分かりますね、そうですね。

浪岡教授 ただし、使えるものは何でも使っていいというスタンスでおりますので、また来年も採点基準を引き上げるしかないかなと考えております。

鈴木講師 そうなりますよね、当然強力な道具を手にしたんだから目標も高めていいですよという発想でいいんじゃないですか。

浪岡教授 そうですね。先ほどの中内先生がとてもいい授業をしてくださっていますので、それに応じてこちらも水準を引き上げて、あの授業を受けているんだから、じゃこの水準まで引き上げていいよねというような感じでやっていくしかないかなと考えております。

鈴木講師 それがいいんじゃないですか。それで、実力がさらについた卒業生が出るわけだから、万々歳ですね。

浪岡教授 そうですね。

鈴木講師 その辺の合意がきちっと得られればいいんですよ、使わせないという大学はあまりないけど、だけど学術的な観点からは引用をはっきりしろとかいうんだけど、生成A I どうやって引用するかって、まだあまり決まっていないですよ、僕は難しいんじゃないかなと思うんですけど。

浪岡教授 あと私の授業の場合、人のまねをどんどんしていいということにさせていただいておまして、その代わり誰かのアイデアをいただいたら、ちゃんとリファアーしなさいと、正しくリファアーしたら最大10点プラスで、正しくリファアーされた側にも最大10点あげるというルールにしております。

鈴木講師 いいですね。となると、一応チャットG P Tに協力を願ったということも一応書くんですか、それは。

浪岡教授 一応生成A I は書かなくてよくて、ほかの一緒にいたグループなり、ほかのグループの発表を聞いて、これはいいアイデアだなと思ったら敬意をもってリファアーするようにとっております。

鈴木講師 いいですね、まさに社会の実務家ではみんなそうですから、当然のことながらそうやってお互いに学んで、さらに高いところ目指すというのは。ありがとうございます。

浪岡教授 こちらこそ。

鈴木講師 本当にそうだなと思います。

越水先生、こんな感じですかね。

越水教授 浪岡先生、すみません、突然の指名にもかかわらず、ご対応いただきまして、ありがとうございます。

浪岡教授 いえいえ、三好先生が必ず当たるよって予言してくださっていたので、ちょっと心の準備がありました。ありがとうございました。

越水教授 それ三好きよみ先生ですか。

浪岡教授 はい。

越水教授 三好きよみ先生、浪岡先生の棚卸の際に何かリアクションで泣き顔のマークが出ていたけど、三好きよみ先生、何か意図があるんですか。何か質問等ありましたら、お願いします。

鈴木講師 泣き顔があったんですね、気がつかなかった。

越水教授 何かリアクションが1個上がりました。

ほかの先生でも何か質問ある方いらっしゃいましたら、お願いします。いかがでしょうか、大丈夫ですかね、本当はもう一件ぐらいやりたいところなんですけど。

すみません、三好きよみ先生、ありがとうございます。

本当は私の事例やってほしいという方がいたら、もう一件ぐらい行ってみたいところなんですけど、4分ぐらいしかなくて、じゃどなたか自分の事例で質問ある方とかいらっしゃいますか。ここを聞いてみたいとか、大丈夫ですかね。

鈴木講師 多くの方が続けたいというところにPBLのような協働的な学びとか理論と実践の補完みたいなところが書かれていて、さすが産技大だなというふうに思いました。

越水教授 ありがとうございます。

鈴木講師 もうこのぐらいやっぱり実務に直結しているということを徹底されているところは、なかなかお目にかかれないなと思って。

越水教授 ありがとうございます。恐縮です。多くの方が社会人学生なので、コンピテンシー上げていただいて、実務に役立てていただく、どの科目もそんなような授業設計になっているんじゃないかなと思います。

鈴木講師 もう本当にストレートの学生さんと違うから、そういう意味では今日学んだことは、もう今日のうちに仕事に使えますぐらいの勢いで来ますから、やっているほうも楽しいし、そういう意味では何でこんなことやんなきゃいけないんだというクレームも結構来ますね、熊本大学のときはそういうかなりやり取りをしながらつくっていったという思い出があります。

越水教授 なるほど、たしかに授業やっていて、受講した学生さんが仕事でこの方法使いましたとか、あるいは部長さんクラスの人が部の全員に習ったことを教えましたとか、社内研修しましたとか言うていただくと、我々も非常にそれが一番うれしいことでありまして、それ励みにやっているよう

なところがあります。

**鈴木講師** 本当おっしゃるとおりですね。そういう意味では、お互いに恵まれている環境だと思いますよ、学生さんが本当に実務直結の人だから。

**越水教授** そうですね、ありがとうございます。

じゃ、先生、そろそろ時間になってきましたので、何かラップアップみたいのありましたら、お願いできればと思います。

**鈴木講師** 今日は、こういう機会いただきましてありがとうございました。このワークショップは、かなり昔につくったんですけど、結構力入れてつくったものなんで、何かのお役に立てればと思いますので、ぜひこのフォーマットを使ってコミュニケーション、お互いにするという道具に役立てていただければありがたいと思います。

あとは、熊本大学でほかにもいろいろやっていますんで、そんなのにも興味があれば、ぜひ……今日は何か全然探し物ができなくて恐縮ですけど、熊本大学で授業をどういうふうに変えていくかというヒント集みたいのも出しています。熊本大学の教師シラバスのウェブサイトへ行っていたら、そういうのがいっぱいありますので、ぜひ活用していただければと思いますということで、何かあまりラップアップになっていませんけれども。

**越水教授** いえいえ、ありがとうございます。皆さん、熊本大学の大学院のサイトを訪ねてみていただけると情報を得られるかと思います。

じゃ、そろそろいい時間になってきましたので、FDフォーラム終了に向けていきたいと思います。

今日ご講義いただいた鈴木克明先生、誠にありがとうございました。皆様もリアクションで拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございます。

**鈴木講師** ありがとうございます。

**越水教授** じゃ、そろそろFDフォーラム、いい時間になってきましたので、閉会の挨拶、吉田研究科長のほうからお願いしたいと思います。

**吉田研究科長** 鈴木先生、どうもありがとうございました。研究科長しております吉田です。本当にどうもありがとうございました。

何か本日今回のフォーマットで、ほかの教員、ほかの先生方の授業の構成というもの、それからどういうふうを考えていくのか、どういうところが重要なのかというところを初めてお互いが見たような気がいたします。3人のまないたの上のコイに上がっていただいた先生方、どうもありがとうございました。ただ、お互い初めてこういうふうにお互いの領域が違うことによって、全然違うものと思って考えていたものを、同じような視点から考えていくということのヒントをいただいたような気がいたします。また、そこにあったものがきちんと考えてまっすぐ設計していくということ、これの重要さというものを鈴木先生に教えていただいたという感が非常に強くございました。本当に

鈴木先生、どうもありがとうございました。

できましたら、引き続き本学の教員も頑張って授業の内容もよくしていきたいと思っておりますので、引き続き機会を見つけながらご指導のほうをいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、どういたしましょう、事務局にお返ししましょうか。

**越水教授** 吉田先生、ありがとうございました。

そして、ご参加の皆さん、今日はお忙しい中ありがとうございました。

そして、鈴木先生、本当にありがとうございました。

**鈴木講師** ありがとうございました。

○閉 会 午後 2時30分

## ■第39回(2025年度第2回)FDフォーラム■

2026年3月5日

東京都立産業技術大学院大学にて開催

### 参加者

[招聘講師]

武蔵野大学響学開発センター長・教授/熊本大学名誉教授

鈴木 克明 先生

[東京都立産業技術大学院大学]

|       |      |        |      |
|-------|------|--------|------|
| 橋本 洋志 | 学長   | 吉田 敏   | 研究科長 |
| 板倉 宏昭 | 教授   | 上田 太郎  | 教授   |
| 内山 純  | 教授   | 奥原 雅之  | 教授   |
| 越水 重臣 | 教授   | 小山 裕司  | 教授   |
| 中鉢 欣秀 | 教授   | 飛田 博章  | 教授   |
| 浪岡 保男 | 教授   | 林 久志   | 教授   |
| 細田 貴明 | 教授   | 三好 きよみ | 教授   |
| 三好 祐輔 | 教授   | 村越 英樹  | 教授   |
| 岡崎 浩二 | 特任教授 | 齋藤 正博  | 特任教授 |
| 高嶋 晋治 | 特任教授 | 田部井 賢一 | 准教授  |
| 尹 国花  | 助教   | 佐藤 里恵  | 助教   |
| 張 晁逢  | 助教   | 中内 遼吾  | 助教   |
| 藤原 宏樹 | 助教   | 馬 瑞潔   | 助教   |
| 横山 友也 | 助教   |        |      |

### ■開催内容:

|             |                  |
|-------------|------------------|
| 13:00-13:05 | 学長挨拶 橋本洋志学長      |
| 13:05-14:25 | 鈴木先生によるご講演及び質疑応答 |
| 14:25-14:30 | 吉田敏研究科長 統括       |

# 2025 年度前期「学生による授業評価」 結果の概要報告

## 授業評価アンケート質問項目(通常科目)

| NO. | 項目                      | 設問                                                                                 | 回答                                                                                                   |
|-----|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | 出席回数(出席率)               | 出席回数(出席率)について回答してください。録画視聴型授業だった場合は、担当教員からの指示への対応(動画の視聴、課題への取り組み等)をもって1回分と数えてください。 | ①0～3回(出席率0～20%)<br>②4～6回(出席率21～40%)<br>③7～9回(出席率41～60%)<br>④10～12回(出席率61～80%)<br>⑤13～15回(出席率81～100%) |
| 2   | 学習意欲                    | この授業の予習や復習、配信されている動画の見直し、レポート制作等に積極的に取り組んだか回答下さい。                                  | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 3   | シラバス                    | シラバス及び当初教員から示された授業計画は、実際の授業内容と大きな相違点はなく、必要な情報が記載してありましたか？                          | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 4   | 学習目的                    | 授業は、各回の目的が明確で、どのようなことを学習しているのか、いま学習していることが何の役に立つか分かりやすかったですか？                      | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 5   | 学生の参加促進                 | 担当教員は、学生との対話(授業中に質疑の時間を設ける、課題作業中に助言する等)に積極的で、授業への参加を促していましたか？                      | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 6   | 教材(教科書等)                | 教科書、配布資料(レジュメ)、黒板(スライド)、プログラムのソースコードなど、担当教員が準備した教材は、授業内容の理解に役立ちましたか？               | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 7   | 教員の熱意                   | 担当教員の指導に熱意はありましたか？                                                                 | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 8   | 教員解説力・指導力<br>(話し方、質疑応答) | 担当教員の解説や指導は分かりやすかったですか？                                                            | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 9   | 有用性                     | 学習した知識やスキルは、あなたの実務や将来の仕事に役に立つと思いましたか？                                              | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 10  | 満足度                     | 学習できた内容に満足しましたか？                                                                   | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 11  | 継続学習性(興味・関心)            | この授業を受講したことで、この授業に関する内容に興味と関心を持ち、更に学習したいと思いましたか？                                   | ①全くそう思わない<br>②あまりそう思わない<br>③どちらとも言えない<br>④ややそう思う<br>⑤強くそう思う                                          |
| 12  | 参加について<br>／遠隔授業         | この授業は全回遠隔で参加しましたか？                                                                 | ①全回、対面で参加した<br>②一部遠隔、一部対面で参加した<br>③全回、遠隔で参加した                                                        |

|    |                    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                  |
|----|--------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 13 | 適性<br>／遠隔授業        | この授業は遠隔授業に適していると考えますか？                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | ①全く適していない<br>②あまり適していない<br>③どちらとも言えない<br>④適している<br>⑤大いに適している                                     |
| 14 | 学習効果<br>／遠隔授業      | この授業を遠隔で実施したことで学習効果は上がったと思いますか？<br><br>※本授業が一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施した授業については回答は不要。                                                                                                                                                                                                                                               | ①非常に下がった<br>②下がった<br>③あまり変わらない<br>④上がった<br>⑤非常に上がった                                              |
| 15 | コミュニケーション<br>／遠隔授業 | この授業において、教員や学生間とのコミュニケーションは十分でしたか？<br><br>※本授業が一部でも遠隔で行われた場合に回答。全回、対面で実施した授業については回答は不要。<br><br>※ここでいう「コミュニケーション」とは、質疑応答や議論など、いずれかが含まれていることを指し、その手段はオンライン対話、manaba掲示板でのメッセージのやりとり(数日の遅延を含める)を含む。                                                                                                                                    | ①非常に不十分だった<br>②不十分だった<br>③どちらとも言えない<br>④十分だった<br>⑤非常に十分だった                                       |
| 16 | モチベーション<br>／動画配信   | 授業に対するモチベーションについて、授業の受講形式に応じて、以下の質問に回答してください。<br>・(リアルタイム授業と録画視聴型授業の両方があった場合)授業に対するモチベーションは、リアルタイム授業に加え、録画視聴型授業があったことによって、途中で変化しましたか？<br>・(リアルタイム授業のみだった場合)授業に対するモチベーションは、録画視聴型授業のみの回を設けた場合、途中で変化すると思いますか？<br>・(録画視聴型授業のみだった場合)録画視聴型授業のみだった場合には、④該当しないを選択してください。<br>※リアルタイム授業・・・リアルタイムで行われている授業を、教室で授業を受講する場合・オンラインで受講する場合のこと指します。 | ①低下したと思う(もしくは、低下すると思う)<br>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)<br>③向上したと思う(もしくは、向上すると思う)<br>④該当しない   |
| 17 | 通学の負担<br>／動画配信     | 通学に関する負担について、授業の参加形式に応じて、以下の質問に回答してください。<br>・(対面授業と非対面授業の両方があった場合)通学に関する負担は、対面授業に加え、非対面授業があったことによって軽くなりましたか？<br>・(対面授業のみだった場合)通学に関する負担は、非対面授業を設けた場合、途中で変化すると思いますか？<br>・(非対面授業のみだった場合)非対面授業のみだった場合には、④該当しないを選択してください。<br>※対面授業・・・教室で授業を受講する場合<br>非対面授業・・・リアルタイムで配信されている授業をオンラインで受講する場合・録画視聴型授業を受講する場合                               | ①重くなったと思う(もしくは、重くなると思う)<br>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)<br>③軽くなったと思う(もしくは、軽くなると思う)<br>④該当しない |

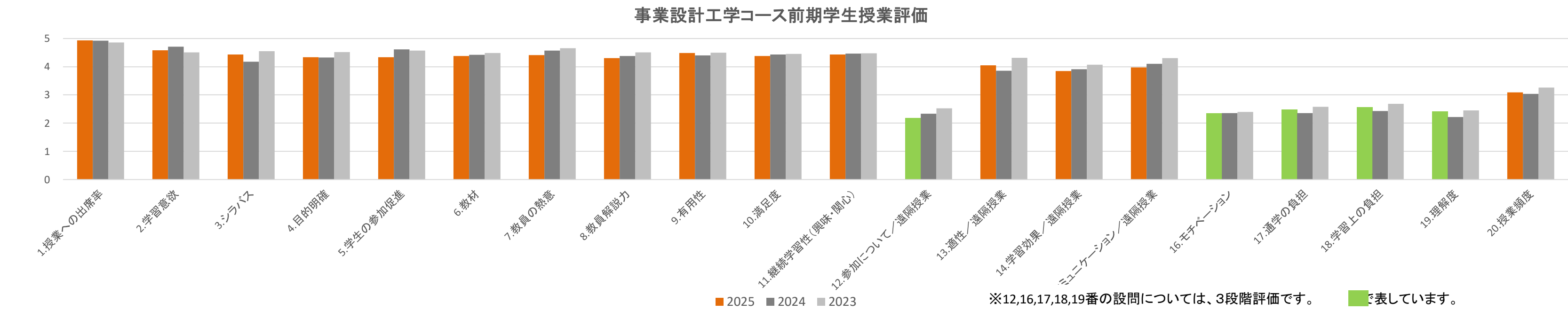
|    |                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                                                                                                    |
|----|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 18 | 学習上の負担<br>／動画配信 | <p>学習に取り組む上での負担について、授業の受講形式に応じて、以下の質問に回答してください。</p> <p>・(リアルタイム授業と録画視聴型授業の両方があった場合)学習に取り組む上での負担は、リアルタイム授業に加え、録画視聴型授業があったことによって、軽くなりましたか？</p> <p>・(リアルタイム授業のみだった場合)学習に取り組む上での負担は、録画視聴型授業のみの回を設けた場合、軽くなると思いますか？</p> <p>・(録画視聴型授業のみだった場合)録画視聴型授業のみだった場合には、④該当しないを選択してください。</p> <p>※リアルタイム授業・・・リアルタイムで行われている授業を、教室で授業を受講する場合・オンラインで受講する場合のこと指します。</p> | <p>①重くなったと思う(もしくは、重くなると思う)</p> <p>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)</p> <p>③軽くなったと思う(もしくは、軽くなると思う)</p> <p>④該当しない</p>                                                |
| 19 | 理解度<br>／動画配信    | <p>この授業内容に対する理解について、授業の受講形式に応じて、以下の質問に回答してください。</p> <p>・(リアルタイム授業と録画視聴型授業の両方があった場合)この授業の内容に関する理解はリアルタイム授業に加え、録画視聴型授業があったことによって深まりましたか？</p> <p>・(リアルタイム授業のみだった場合)この授業内容に対する理解は、録画視聴型授業のみの回を設けた場合、深まると思いますか？</p> <p>・(録画視聴型授業のみだった場合)録画視聴型授業のみだった場合には、④該当しないを選択してください。</p> <p>※リアルタイム授業・・・リアルタイムで行われている授業を、教室で授業を受講する場合・オンラインで受講する場合のこと指します。</p>    | <p>①理解が浅くなったと思う(もしくは、理解が浅くなると思う)</p> <p>②あまり変わらなかったと思う(もしくは、あまり変わらないと思う)</p> <p>③理解が深まったと思う(もしくは、理解が深まると思う)</p> <p>④該当しない</p>                                      |
| 20 | 授業頻度<br>／動画配信   | この授業に録画視聴型授業のみの回を設ける数として、適切だと思う回数(割合)を教えてください。                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | <p>①0回(この授業は、すべて対面授業形式(遠隔授業を含む)で実施した方がよい)</p> <p>②4回程度(全授業回数の25%程度)</p> <p>③8回程度(全授業回数の50%程度)</p> <p>④12回程度(全授業回数の75%程度)</p> <p>⑤15回(この授業は、すべて動画配信形式で実施した方がよい)</p> |
| 21 |                 | 良かった点や、他の授業にも取り入れて欲しい点等について記述して下さい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 自由記述                                                                                                                                                               |
| 22 |                 | 悪かった点や、改善した方がよい点等について記述して下さい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 自由記述                                                                                                                                                               |
| 23 |                 | 授業をより良くするための提案や、授業内容に対する意見、担当教員に伝えたいメッセージ等を記述して下さい。                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 自由記述                                                                                                                                                               |
| 24 |                 | 質問項目13-20の遠隔授業に関する質問以外で、気付いたこと、感じた点等について記述して下さい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 自由記述                                                                                                                                                               |
| 25 |                 | 上記の質問項目で、評価1を選択した場合にはその理由を記載してください。<br>複数の質問項目で評価1を選択した場合にはそれぞれの理由について、記載するようお願いいたします。                                                                                                                                                                                                                                                            | 自由記述                                                                                                                                                               |

分析グラフ

以下のグラフと表は、36ページから39ページ・59ページから61ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

【事業設計工学コース(前期)】  
前期学生授業評価平均値

| 設問   | 1         | 2      | 3      | 4      | 5         | 6    | 7       | 8       | 9     | 10     | 11              | 12             | 13         | 14           | 15                | 16         | 17       | 18        | 19     | 20      |
|------|-----------|--------|--------|--------|-----------|------|---------|---------|-------|--------|-----------------|----------------|------------|--------------|-------------------|------------|----------|-----------|--------|---------|
|      | 1.授業への出席率 | 2.学習意欲 | 3.シラバス | 4.目的明確 | 5.学生の参加促進 | 6.教材 | 7.教員の熱意 | 8.教員解説力 | 9.有用性 | 10.満足度 | 11.継続学習性(興味・関心) | 12.参加について／遠隔授業 | 13.適性／遠隔授業 | 14.学習効果／遠隔授業 | 15.コミュニケーション／遠隔授業 | 16.モチベーション | 17.通学の負担 | 18.学習上の負担 | 19.理解度 | 20.授業頻度 |
| 2025 | 4.94      | 4.58   | 4.43   | 4.34   | 4.34      | 4.38 | 4.41    | 4.30    | 4.48  | 4.38   | 4.44            | 2.18           | 4.05       | 3.85         | 3.97              | 2.35       | 2.48     | 2.57      | 2.42   | 3.09    |
| 2024 | 4.92      | 4.71   | 4.18   | 4.33   | 4.61      | 4.42 | 4.57    | 4.38    | 4.40  | 4.43   | 4.47            | 2.33           | 3.86       | 3.91         | 4.10              | 2.35       | 2.35     | 2.43      | 2.22   | 3.04    |
| 2023 | 4.85      | 4.50   | 4.55   | 4.52   | 4.57      | 4.48 | 4.65    | 4.51    | 4.50  | 4.45   | 4.48            | 2.52           | 4.32       | 4.07         | 4.30              | 2.40       | 2.58     | 2.69      | 2.45   | 3.26    |



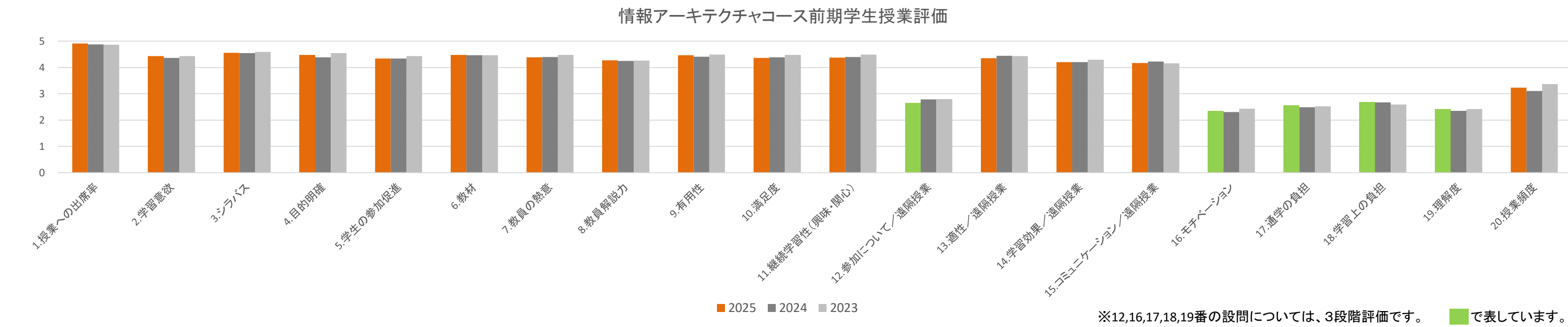
# 分析グラフ

以下のグラフと表は、41ページから 48ページ・63ページから71ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

## 【情報アーキテクチャコース(前期)】

### 前期学生授業評価平均値

| 設問   | 1         | 2      | 3      | 4      | 5         | 6    | 7       | 8       | 9     | 10     | 11              | 12             | 13         | 14           | 15                | 16         | 17       | 18        | 19     | 20      |
|------|-----------|--------|--------|--------|-----------|------|---------|---------|-------|--------|-----------------|----------------|------------|--------------|-------------------|------------|----------|-----------|--------|---------|
|      | 1.授業への出席率 | 2.学習意欲 | 3.シラバス | 4.目的明確 | 5.学生の参加促進 | 6.教材 | 7.教員の熱意 | 8.教員解説力 | 9.有用性 | 10.満足度 | 11.継続学習性(興味・関心) | 12.参加について／遠隔授業 | 13.適性／遠隔授業 | 14.学習効果／遠隔授業 | 15.コミュニケーション／遠隔授業 | 16.モチベーション | 17.通学の負担 | 18.学習上の負担 | 19.理解度 | 20.授業頻度 |
| 2025 | 4.91      | 4.43   | 4.55   | 4.48   | 4.34      | 4.48 | 4.39    | 4.27    | 4.46  | 4.37   | 4.37            | 2.66           | 4.35       | 4.20         | 4.17              | 2.34       | 2.57     | 2.68      | 2.42   | 3.23    |
| 2024 | 4.88      | 4.36   | 4.55   | 4.39   | 4.34      | 4.46 | 4.40    | 4.25    | 4.41  | 4.39   | 4.40            | 2.78           | 4.44       | 4.20         | 4.23              | 2.31       | 2.49     | 2.67      | 2.35   | 3.10    |
| 2023 | 4.86      | 4.43   | 4.59   | 4.55   | 4.43      | 4.47 | 4.48    | 4.26    | 4.49  | 4.48   | 4.49            | 2.80           | 4.43       | 4.29         | 4.16              | 2.43       | 2.52     | 2.60      | 2.42   | 3.37    |

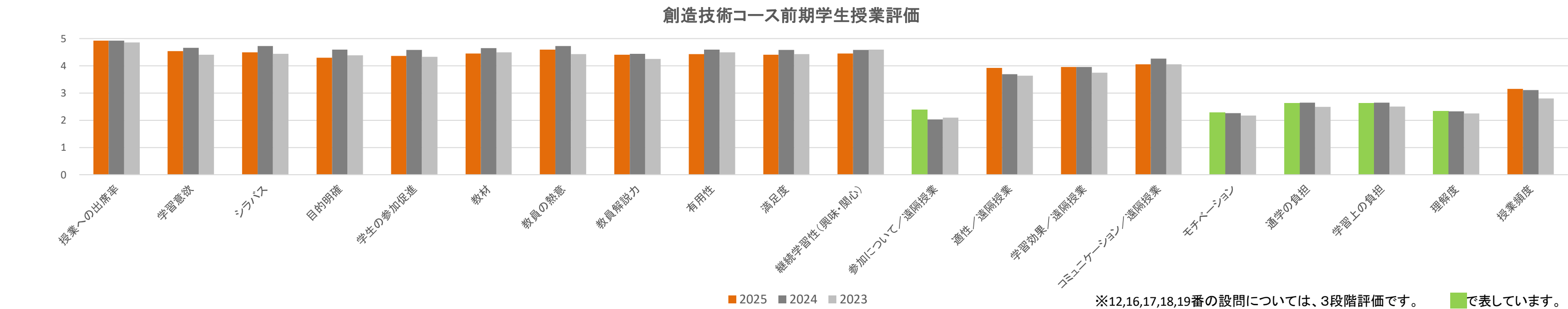


# 分析グラフ

以下のグラフと表は、50ページから54ページ・73ページから79ページに示したアンケートの回答を以下のとおり数値化し、平均値をグラフ化したものである。  
※ 設問12,16,17,18,19は、3段階評価で実施

## 【創造技術コース(前期)】 前期学生授業評価平均値

| 設問   | 1       | 2    | 3    | 4    | 5       | 6    | 7     | 8     | 9    | 10   | 11           | 12          | 13      | 14        | 15             | 16      | 17    | 18     | 19   | 20   |
|------|---------|------|------|------|---------|------|-------|-------|------|------|--------------|-------------|---------|-----------|----------------|---------|-------|--------|------|------|
|      | 授業への出席率 | 学習意欲 | シラバス | 目的明確 | 学生の参加促進 | 教材   | 教員の熱意 | 教員解説力 | 有用性  | 満足度  | 継続学習性(興味・関心) | 参加について／遠隔授業 | 適性／遠隔授業 | 学習効果／遠隔授業 | コミュニケーション／遠隔授業 | モチベーション | 通学の負担 | 学習上の負担 | 理解度  | 授業頻度 |
| 2025 | 4.92    | 4.54 | 4.50 | 4.30 | 4.36    | 4.45 | 4.59  | 4.41  | 4.43 | 4.41 | 4.45         | 2.39        | 3.92    | 3.96      | 4.05           | 2.28    | 2.62  | 2.63   | 2.34 | 3.15 |
| 2024 | 4.92    | 4.66 | 4.72 | 4.60 | 4.58    | 4.65 | 4.72  | 4.44  | 4.60 | 4.59 | 4.59         | 2.03        | 3.69    | 3.96      | 4.27           | 2.26    | 2.65  | 2.65   | 2.33 | 3.11 |
| 2023 | 4.86    | 4.41 | 4.44 | 4.38 | 4.33    | 4.50 | 4.43  | 4.25  | 4.50 | 4.42 | 4.59         | 2.09        | 3.64    | 3.74      | 4.06           | 2.18    | 2.50  | 2.50   | 2.25 | 2.80 |



## ■ 第1クォータ アクションプラン ■

### 1 各コース共通科目

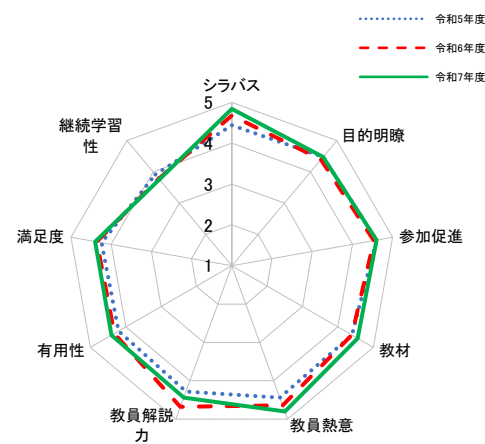
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 技術倫理

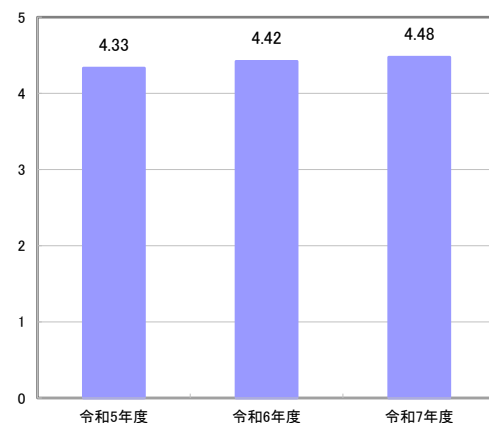
氏名： 伏見 靖/越水 重臣

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

（１）出席率：極めて良かった。原則として１限が講義、２限が講義内容に関連したグループワークという形式であり、グループワークがレポート作成に重要だということを事前に周知していたので、参加へのモチベーションが高かったと思う。（２）自己学習量：良かった。ネットで情報収集しやすいものをテーマとしたため、サーチ結果をレポートに反映する学生が多かった。（３）目的明確性：良かった。講義とグループワークを連動されていた他、学生自身の経験や日頃の問題意識等とうまく合致した。（４）学生の参加促進：高かった。全体的に積極的な学生が多く、グループワークにて、自分とは違う意見や価値観に触れて良かったという意見があった。（５）教材及び教員解説力：講義開始の時点で全期間のタスクをmanabaも併用して開示したので、学生にとってスケジュールを立てやすいという評価があった。（６）その他：講義の一部についてリモート実施希望の意見があったので、一部については、リモート実施も検討したい。学生のプレゼンが長いという意見があるので、リモート実施も含めて改善を検討したい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

（１）講義の冒頭に学生自身が調べた最新事例の発表をして貰ったところ、有意義だったという意見があった。引き続き行う予定である。（２）グループディスカッションのメンバーを毎回入れ替えて、様々な意見が聴けると共に、学生同士の交流が図れるように配慮する予定である。（３）レポートの書き方について、事前にフォーマットの一例を紹介することで、レポート作成に慣れていない学生については、書きやすいように工夫した。このため全体的に高水準のレポートが多かった。（４）グループワークやレポート作成に生成AIを使うかどうかは学生に任せたが、アウトプットについては、特に違和感はなかった。

## ■ 第1クォータ アクションプラン ■

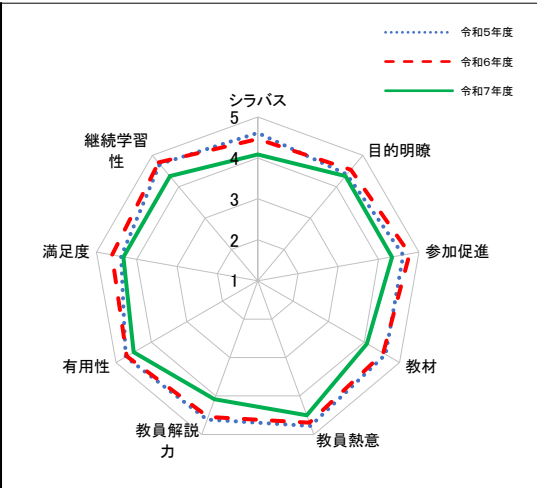
### 2 事業設計工学コース科目

「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

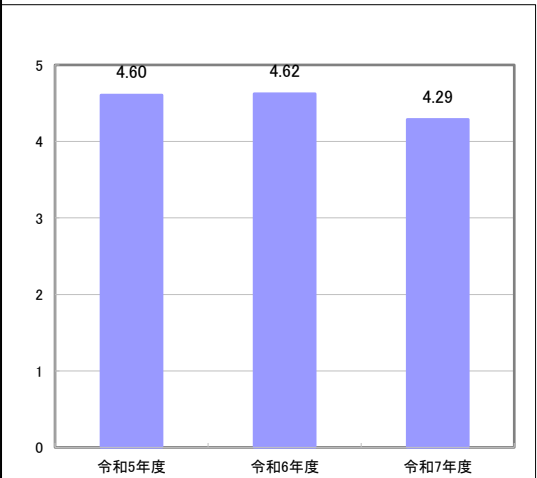
講義名： 会計・ファイナンス工学演習  
氏名： 三好 祐輔

1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

・非常に熱意のある指導やフィードバックに、学習意欲が高まりました。厳しくもあり優しさがあったこと。  
・授業時間以外の時間に、同じチームで打ち合わせを頻度高く行ったのは良かったこと。  
・一人一人の学習状況や理解度を気にかけ、授業内容を調整していた点。  
・親身になって、基礎から細かく教えていただいたので、短期間で授業内容への理解度がかなり深まりましたこと。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

総じて、良い評価をいただきました。第三Qの講義も、今の講義スタイルでやっていきます。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： サービスサイエンス特論

氏名： 松尾 徳朗

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

#### 【ポジティブなコメント】

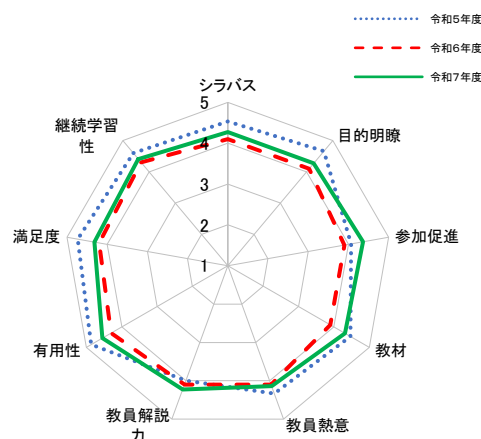
- 理論と実践が交互にプログラムされており、インプットとアウトプットのバランスが非常に良かった。
- グループディスカッションの時間も多くあったので、ビジネス起業の視点をもって議論できたように感じる。
- 毎回土曜の授業でグループワークがあり課題に取り組み、提出をする、みんなでフィードバックを書く講義の内容は、とても良いやり方だなと思いました。
- 動画でインプットされた事の実践にもなるので、学習の定着にも繋がっていたと思います。

#### 【ネガティブなコメント】

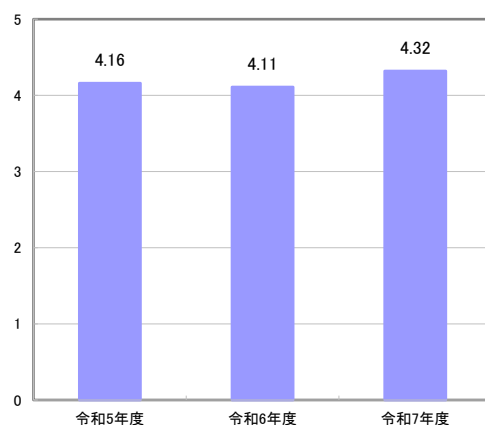
- 事例の研究などももう少し具体的かつ最近の事象などを入れていただけるとより良くなると感じた。
- 講義スライドの関連性が分かりづらいため、全体像をしめた方が良いと感じる
- 最終試験のスタートボタンを押すと試験が始まってしまうため、押したら始まってしまう旨注意書きを表示してほしい。
- 今回の内容の改変箇所に対して、講義内での理由・言及がなく、内容に対する疑義がぬぐえなかった。また、その改変部位がレポート課題における配点対象であったため、違和感が残った。

#### 【その他のコメント】

- 本講義と関連付けて学ぶことが推奨される講義名を、学内で情報提供してもらえるとありがたい。授業を履修するときの参考になると思う。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

事例の研究などももう少し具体的かつ最近の事象などについて言及する。また、講義スライドの関連性について、オーバービューを提示する。最終試験について、回答者がミスをしにくいように配慮する。また、従来研究において古い箇所については講義中に言及し、新たな視座の理解を促進する。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 事業設計工学概論

氏名： コース担当教員

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

#### 【ポジティブなコメント】

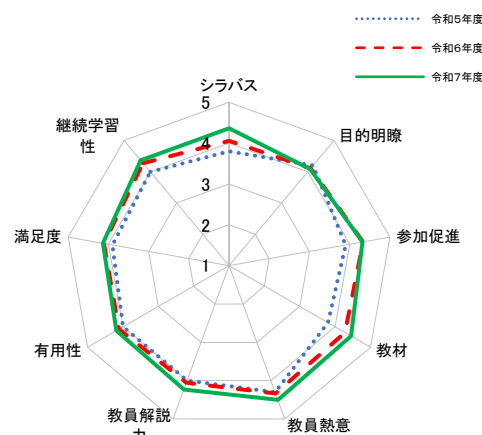
- 毎週異なる先生が異なるテーマの授業を担当し、色々な分野の知識に触れることができた。
- それぞれの先生がどのようなことに取り組み、研究しているかがよくわかって一番最初の授業としてはとても良かった。
- 事業設計の様々な先生によるご講義は大変貴重な機会であった。このような講義をご設定いただいたことに感謝したい。

#### 【ネガティブなコメント】

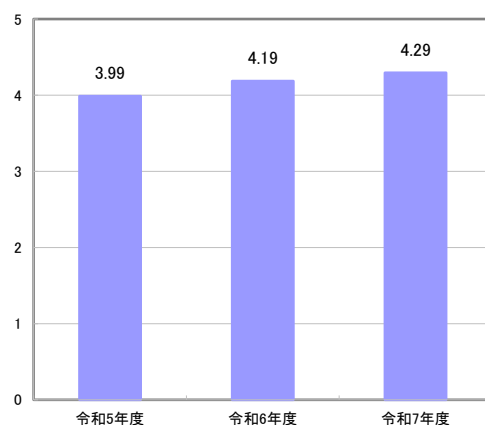
- 全体を通して何をゴールに学んでいるのかが分からなくなった。
- 事業設計工学の全体を、オムニバスのように紹介することがこの講義の意図だったか？毎回の講義で扱うテーマがバラバラなので、何をその講義から得れば良いのか、またテーマ間の繋がりをどう感じたらよいのかがとても分かりにくかった。
- 研究内容を紹介しながら進めるタイプの講義の場合は深く紹介してほしい。内容を端折られるともはや意味ない感じがして、分野の中の立ち位置もロジックも中途半端なままだし、批判的考察もできない。

#### 【その他のコメント】

- 事業設計工学の概論というよりもむしろ、研究室訪問や紹介のような内容となっているため、授業内容と名称の見直しを検討しても良いのではないかと感じます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

上記、各教員が協力してテーマ統一感のある内容に継続的に仕上げていき、この科目の主眼である事業設計工学に関する導入となるように改善する。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： マネジメントシステム総論

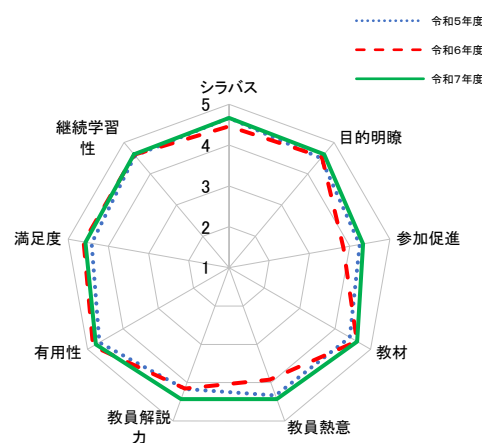
氏名： 板倉 宏昭

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

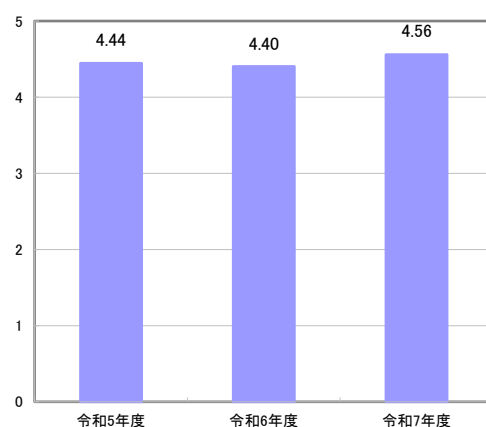
ビジネススクールで学ぶ内容を体系的に解説して、ケースや問題集をそろえた基本書にそって、授業を進めていることが評価されている。

例えば、「教科書という定まった形で勉強をする土台があったことは、自学にとっても役に立った。」「MBAの要素が全体的に学べたのがよかった」「授業スケジュールや内容、進め方が非常に明確で学習に取り組みやすかったと感じました」といった指摘である。

第2に、基本書にそったケーススタディを行うことが評価されている。例えば、「学生同士のグループワークについてほとんど毎回同じメンバーで行ったが、その方が毎回コミュニケーションがやり易かったので、他の講義でもそのような形式が良いと感じた。」「グループワークの課題は実践的で非常に良かったと感じています。」といった指摘である。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

本授業は、社会人にとっては、ハードな内容である。「小テスト、課題提出物、またチームでの提出物が多く、負荷が大変におおきかったようにおもう。だがそれゆえに学びは深くかつ大きかったと思う。」といった指摘にみられるように、米国のビジネススクールで一般的な経営学の基本知識を多く含むため、楽な内容でない。負担が過大にならないように配慮しつつ、理論と実践の架け橋になるような基礎知識の確保に貢献してまいりたい。

## ■ 第1クォータ アクションプラン ■

### 3 情報アーキテクチャコース科目

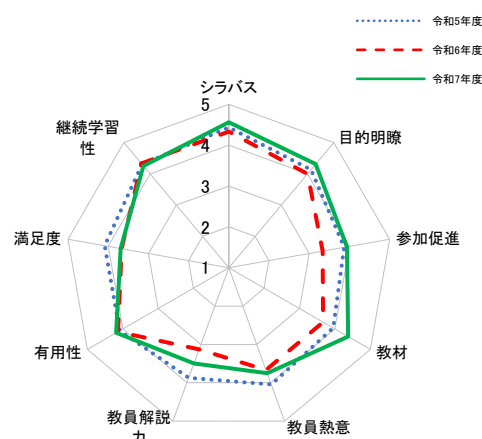
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： オブジェクト指向プログラミング特論

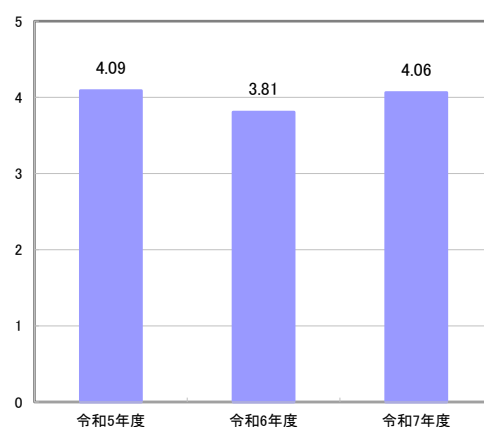
氏名： 張 晁逢

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

今回の「オブジェクト指向プログラミング特論」に対する学生の評価では、授業内容の分かりやすさと進め方の良さが特に高く評価された点が重要である。具体的には、抽象的な概念も具体例を交えて説明され、演習時間が十分に確保されていたことにより、初学者でも無理なく理解を深められたとの声が多かった。また、毎回の授業に対応した課題がリズムよく出題され、学習のステップアップが実感できたことも好意的に受け止められている。さらに、遠隔授業形式についても、オンデマンド配信により自宅から学修でき、働きながら履修する学生にとって大きな支えとなった点が好評であった。一方で、授業中の質問への回答が不十分な場合があったこと、講義レベルと期末試験レベルの乖離、プログラミング科目でありながら筆記試験のみで評価している点など、改善を求める意見が一部見られた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

授業の分かりやすさや課題設定、演習時間確保といった良い点は今後も継続し、遠隔授業の利便性も維持する。一方で、授業中の質問対応については即答が難しい場合も必ず後日回答を約束し、学生の疑問を残さない仕組みを徹底する。また、試験内容については筆記だけでなく、プログラミング演習課題の提出など実践力を評価できる形に見直し、講義レベルとの一貫性を高めることで、学修成果をより適切に測ることを目指す。

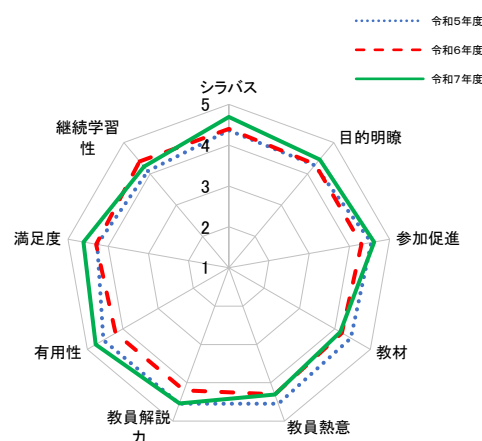
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： コミュニケーション技術特論

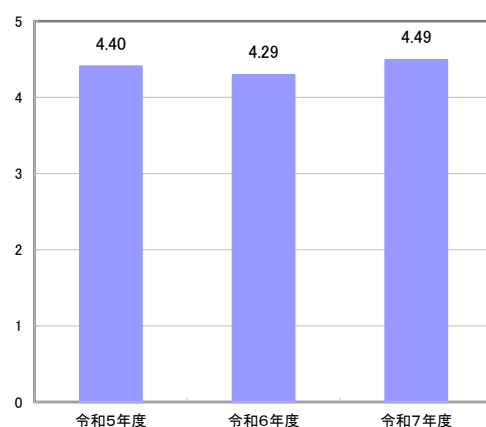
氏名： 中鉢 欣秀

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

授業評価においては受講生の事前知識やモチベーションが多様であり、なおかつ、年度に応じてそれらが異なるため数値的尺度に基づく定量比較は難しい。ある種の目安として評価結果を受け止め、評価の低いものについては継続的に改善を行い、高いものについてはこれを維持して行きたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

特段授業内容に関する具体的な改善要請は見受けられなかったが、来年度の授業実施に向けて継続的に改善し、より高い評価が得られるよう務める。教材については様々な手段で得られた改善提案を受け止め、必要に応じて内容の改訂を行っていく。また、シラバスについては、事前の学習者の期待と実際の授業内容との乖離が生じないように注意しながら必要に応じて修正する。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： システムソフトウェア特論

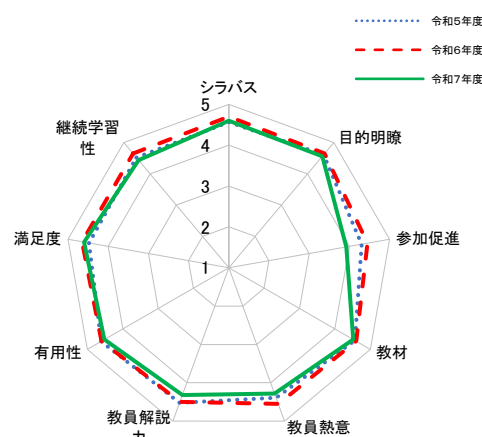
氏名： 柴田 淳司

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

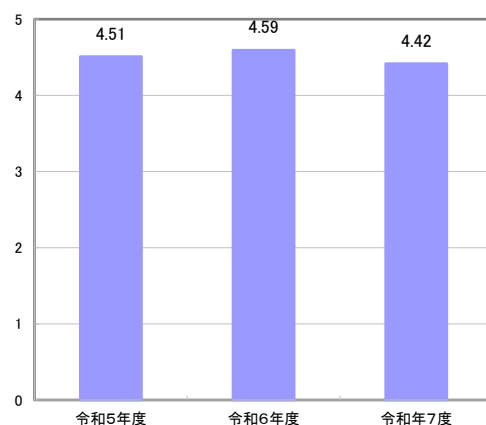
全体的な評価の傾向は昨年度と変わらず、オンラインでの授業で十分という評価が多かった。一方で、一部学生からの教員とのコミュニケーション不足が指摘されている。具体的には、対面の方がモチベーションが保てる、質疑応答の時間が少ないなどが挙げられている。

結果の原因として、時間割の変更が挙げられる。以前は水曜7限、土曜5限だったため、授業前後に時間的余裕がある学生が多く、対面時に会話できる機会があった。しかし、今回は水曜6限、土曜4限と前後に授業もしくは自身の業務がある時間割となったため、会話の時間が減っている。

今年度は、風邪で急遽休みになるなど予期せぬ予定変更が重なったことも低評価につながっていると考える。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

これまでの対策として、オフィスアワーにオンライン対応をしていたが、アナウンスが不十分、開始時間が他科目とかぶっていた点を反省し、土曜のランチタイムに変更して学生が来やすい環境を整える。

また、録画を意識して質疑時間を授業時間最後にまとめていたが、授業を前半後半で分けて質疑時間をしっかり設ける。

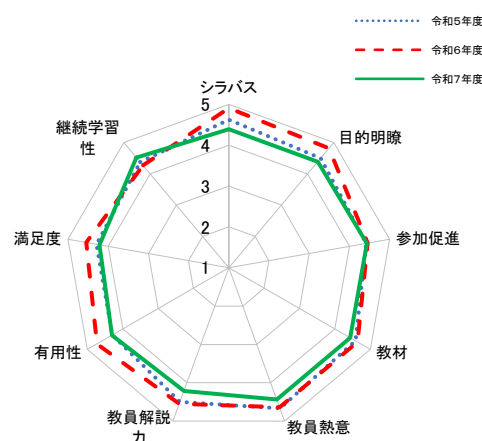
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報アーキテクチャ特論1

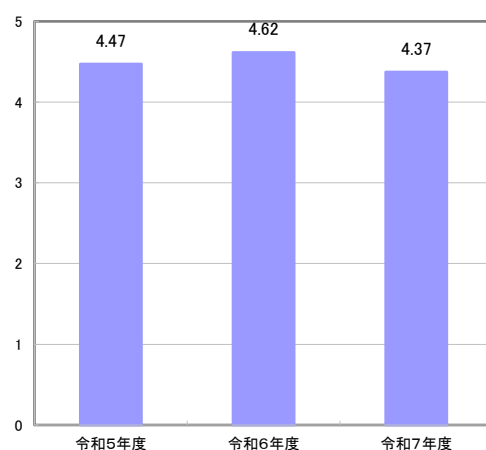
氏名： 小山 裕司

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

今年度は履修者32名、不可2名、対象者30名、回答者24名、総合平均が4.62から4.37に下がり、個々の項目でも概ね下げた。ただし、「興味・関心」は4.27（昨年度もっとも低い）から4.52（今年度もっとも高い）と大きくあがった。今年度、授業資料は大きく更新したが、内容自体は大きく変更したところはないが、シラバスと授業内容の相違、授業資料、授業目的の項目であっても0.2-0.3下げている。内訳をみたところ、3名から1-3の評価を多くいただいている。低い評価から3名を除くと、「学生との対話」と「解説のわかりやすさ」と「興味・関心」で1名、「将来の仕事に役に立つ」で2名、「満足度」で3名が評価3をいただいているが、残りは評価4-5であり、4と5が同数10だった「解説のわかりやすさ」を除くと評価5がもっとも多かった。これらのことから、総合平均及び個々の項目で下げている理由の一部は一部の学生との相性の問題だと思われる。これが一過性のものか、授業内容等を大きく改善する必要があるかは、次年度の評価を勘案し、判断したい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

評価平均からは、直ちに大きく改善をする必要はないと感じたが、いただいたコメントから善し悪しの内容を受け取り、授業改善を適切に継続したい。

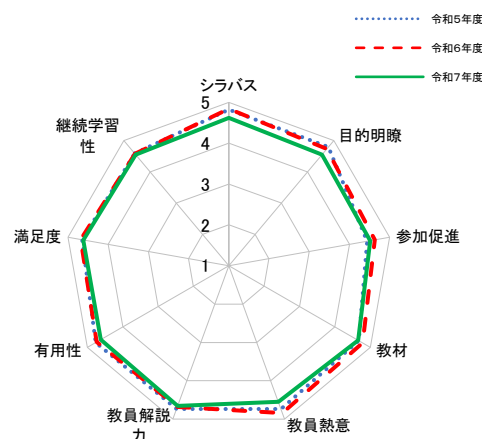
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報セキュリティ特論

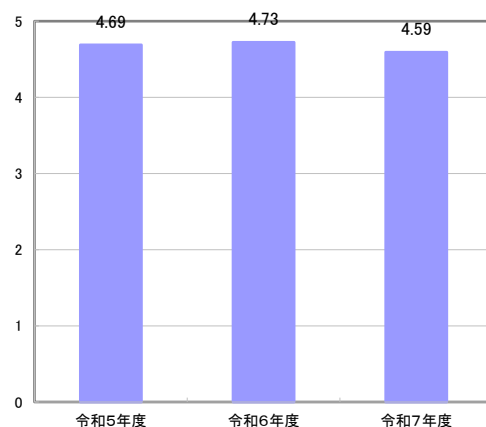
氏名： 奥原 雅之

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

- ・授業開始時に定刻通り参加した受講者へのサービスとして始めた、各授業回の冒頭の「今日のトピック」（その時々セキュリティ事故やニュースなどの簡単な解説）が、引き続き評価が高い。学生が普段この種の情報に触れる機会がないことを反映していると考えられる。
- ・本科目の開講形式（対面、遠隔、録画すべて可のハイフレックス型）も例年通り高評価である。録画授業は業務都合で参加できない受講生にとって機会損失にならない手段となっており、有用であると思われる。
- ・「講義内容に比べて試験の内容が難しい」という指摘があるが、資料持込可の試験のため、難易度を下げると全員が満点近い点を簡単に取れてしまう。事前により深い学習をした学生に報いるという方針のため、当分は現状維持としたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・特に高評価である「今日のトピック」「ハイフレックス型授業」を含め、肯定的に評価された部分は今後も維持・改善を行っていく。
- ・講義内容とシラバスの一致について低評価の回答があった。次回シラバス更新時に内容を確認したい。
- ・本年度より試験問題の回答用紙に「出題ミスの連絡欄」を付与したところ、出題に関する有益な指摘が複数あった。採点および問題品質改善に有効な手段と考えられるので、今後他の科目での採用も検討する。

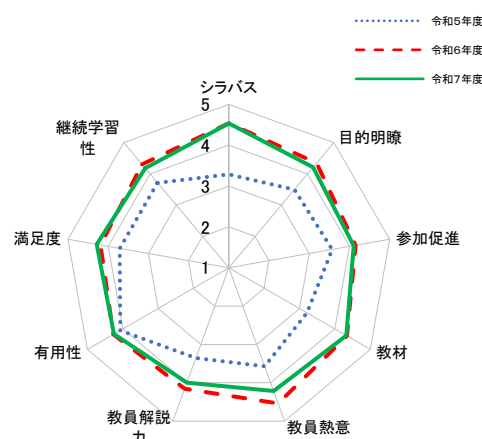
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： ネットワーク特論

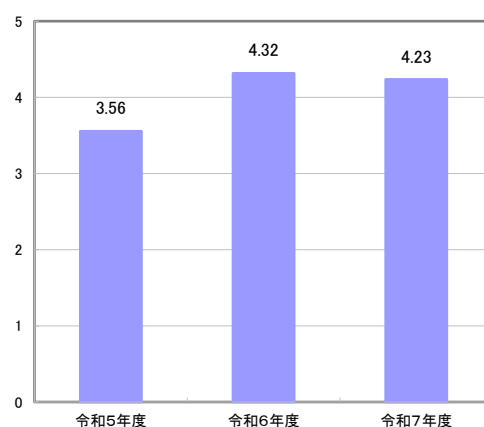
氏名： 追川 修一

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

評価の平均は4.23となり、前年度の4.32とほぼ同じ結果となった。項目で評価が高かったのが、シラバスと授業内容の相違 4.54 と配布資料 4.32であり、低かったのが、解説のわかりやすさ 4.00, 学生との対話 4.11, 興味・関心 4.18 である。シラバスと授業内容の相違は昨年度も高かったが、初回授業で授業計画を課題のスケジュールも含めて明確にした点が、社会人には有用であるからと考えられる。配布資料の評価が高いが、解説のわかりやすさの評価が低いという、相反する結果については、一般的なTCP/IPネットワークの内容についての評価が高く、レベルの高い内容として紹介している分散システムが難しいことが、アンケートから読み取れる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生からの良い評価があった初回授業で授業計画を明確にしていることと、manabaを用いて毎回の講義についてのフィードバックと回答については、本学の特徴である多様な学生の授業への期待が変化したとしても、有効であるため、継続していく。アンケートの悪かった点として、課題がプログラミングに偏っていることと、満点の回答例を示さないことに対する指摘が複数あった。これらについては、その理由をしっかりと説明するようにする。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： フレームワーク開発特論

氏名： 安川 要平/中鉢 欣秀

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

昨年度以前から実施してきた、

- A: 動画+Webテキストなどの教材セット

- B: 生成 AI による24時間の質問サポート

- C: 提出レポートに対するフィードバック会

に加えて、今年度から新たに実施した、

- D: AI 活用を前提とした、よりシンプルな採点基準

<https://speakerdeck.com/yasslab/how-your-reports-are-assessed?slide=33>

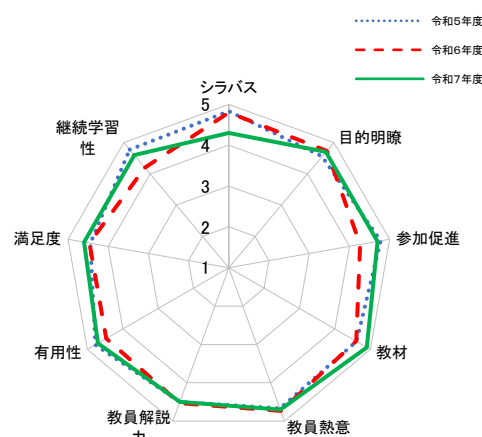
- E: フィードバック会を見たいシーンから見れる、動画目次の自動生成

<https://x.com/yasulab/status/1940419612044316736>

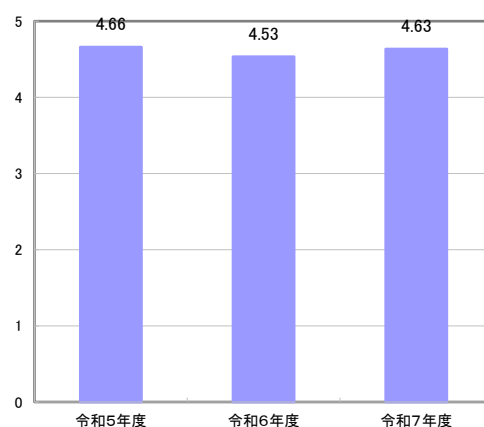
などにより、昨年度に続き高い水準の授業評価を維持できて嬉しいです。

特に昨年度以前から継続的に来ていたリクエスト「動画の目次（タイムテーブル）が欲しい」が、今年は例年に比べほぼ無かったことを鑑みると、昨年度に掲げた改善の目標案は無事に達成できたようです。

「要望は理解できるけれど、現実的な予算と工数（講師代で人を雇って動画目次を作成する等）では実現が難しい」といった状況が、新しいテクノロジーによって現実的なリソースの範囲内で実現できるようになってきているので、今後もコンテンツの継続的な更新に加えて、テクノロジーによって学生の学習体験を向上できるよう、努めていきます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

コンテンツ更新の要望があり、こちらはまだ対応しきれていない部分があり、当然ながら学生の学習体験の向上にもつながるため、次回の講義までにコンテンツの更新を最優先に取り組んでいきたい。

その上で、もし余力があれば、以下の改善案にも取り組んでいきたい。

『動画目次の完全自動化』

まだ一部のフローに人間の手がかかってしまっているのので、録画ボタンを押したら、以降は目次生成まで全て自動化されるようにする

『レポート回答への一時的な個別コメント』

レポート提出から採点結果が出るまでの時間を、より短縮するための取り組み。 \*\*成績と関連する採点とは別に\*\* AI によるコメントであれば迅速かつ個別に返すことができそうなので、一度試してみたい。ただし、どんなコメントであっても成績とは関係ない、という枠組みでの取り組みにする予定です（成績と関係あるのは講師による採点など、シラバスに記載されている部分のみ。あくまで「コメント」となります）

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： プロジェクトマネジメント特論I

氏名： 三好 きよみ

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

以下のようなコメントがあった。

□ 動画視聴は座学、オンタイム授業ではディスカッションとメリハリがある授業で楽しく学べる事が出来たと感じています。ディスカッション後の気付きとして、まとめて翌週共有いただいている資料は、色々な視点をキャッチアップ出来る良い機会でした。

□ 発表形式が委ねられていることによって、各班で独自の工夫をすることができ、それらを見比べることも学びになっていて良かったです。

□ グループワークで最初は皆さん慣れていないので、なかなか内容がまとまりづらく、3回目くらいまでは、発表用のテンプレート書式がほしいと思いました。

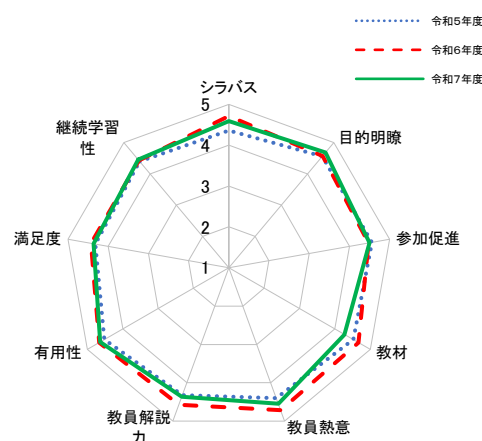
□ 他の学生の宿題や気づきを参照できたことで学びが深まったのが良かったです。

□ 配布資料は簡潔にして必要十分な情報量であり、ケーススタディのテーマもとっつきやすいものが選ばれていたのが良かったです。

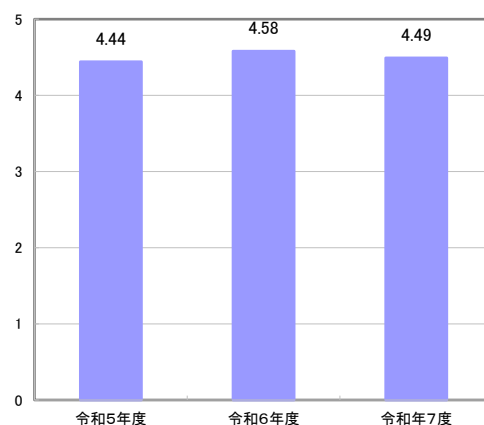
□ 事前に個人で取り組む課題について、具体的な回答例があるとグループワークで協議しやすくなるのではないかと思います。

□ 個人レポートの提出が当日限りだったので、少しだけ伸ばして期限を延ばして欲しかった。

□ 授業期間中に何回かアンケートに回答する機会があり、提案された改善点については、先生のほうで丁寧に拾われていたので、残課題となっている点はありません。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

□ 基本事項の学修→個人ワーク→グループディスカッションのサイクルが好評であったので、継続していく。

□ ハイブリッド回では、その日のうちに提出された個人レポートをとりまとめて公開している。教員側では個人ごとの理解度や感想を確認でき、学生側では他の人の状況がわかることで学修成果を高めることができているようである。今後も継続したい。

□ 個人ワークについては、WBS、EVM、スケジュールなど正解があるものは回答例を示しているが、その他は、あえて示していない。今後は、回答例として複数の例を提示したい。

□ 個人レポートなどの提出物は期日後も受け付けていることを明確に提示する。

## ■ 第1クォータ アクションプラン ■

### 4 創造技術コース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： インテリジェントシステム特論

氏名： 林 久志

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

○グループワークや演習が好評

「何度かグループで課題を解く時間があり、他の学生との交流時間があってとてもよかったし、互いに授業の理解度を増すことができたからよかったです。」

「グループワークや演習があるのが良かった。」

「演習、レポート、グループワークは楽しめた上に学びが深く、有意義でした。」

「学生間の横のつながりが薄いなかで、インタラクションの場を多めに設けていただき周囲の学習状況などが少しわかり自分の学習の指標に繋がった。」

○研究や専門に関する雑談が好評

「私は授業内容にはとても満足しているのと、先生の専門性と経験を授業中に何度も感じることができ、非常に良い経験ができたと思いました。」

「先生の研究のことを授業に触れてもらったことで、どんなことに活用されているかが知れてよかった。」

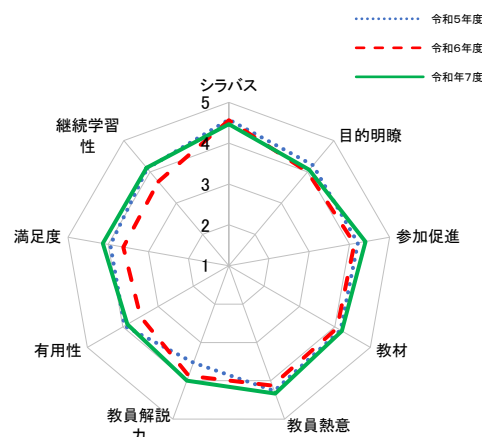
「最終回で先生がおっしゃっていた、LLMエージェント（コネクショリズムAI）でシンボリックAIを実現する話は興味深く、詳しく知りたいと思いました。」

○遠隔・録画講義が好評

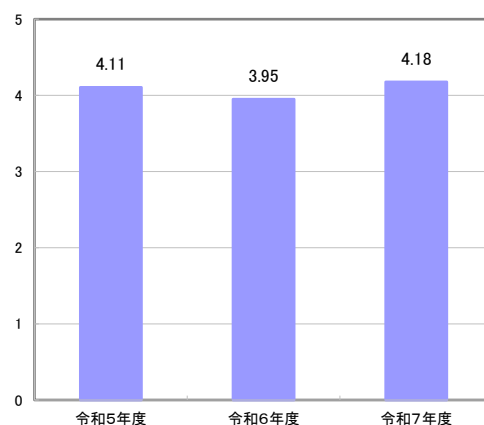
「遠隔授業は非常に便利で、自分のペースで学習を進めやすかったです。資料の共有や画面説明はわかりやすく、対面授業に劣らない学習効果を感じました。」

「受講者サイドとしては時間の融通が利くことで受講しやすく、後追い録画視聴でキャッチアップすることが可能なため、講義を落とさずに済んだので助かりました。」

「録画授業とハイフレックス授業のメリハリがあり、仕事をしながらのカリキュラムとして融通が利いた。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

グループワーク・演習は好評なので、継続していく。

オンライン・録画講義も好評なので、継続していく。

過去や現在の研究の話雑談をいれていくことも好評なので、適宜紹介する。

難しいと感じる学生はいるが、現状では講義のレベルは問題なさそうである。

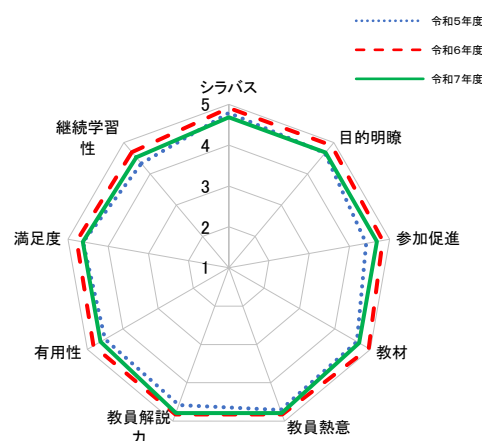
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 創造設計特論

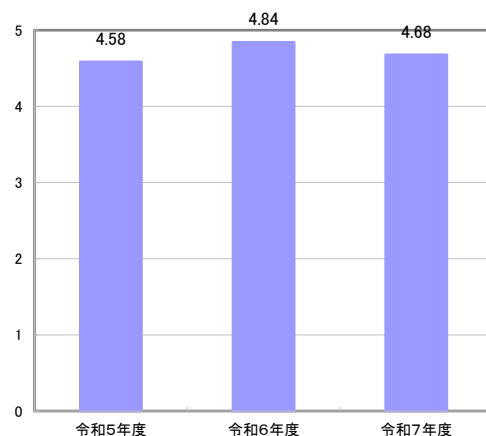
氏名： 越水 重臣

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

アンケート評点の平均値は前年度から若干下がったが、それでも高い評点を維持できているように思う。  
この授業は対面による講義（ハイフレックス講義）をビデオによるオンデマンド講義の組み合わせで実施している。学生の自由記述には、「ビデオが良くできていた。理解するために何度か見直した」であるとか、「配布された資料やスライドのデザインが見やすく、情報も整理されていたため、復習に役立った」などの声も聞かれ、今更ながら教材の重要性を再確認できた。引き続き、改善を図っていきたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

対面授業の回は、毎回、グループワーク（10～15分程度）を取り入れている。そのため、アンケートの自由記述欄においても、グループワークに関する意見が多数見られた。  
「他の学生と意見交換をすることで理解が深まった」  
「グループワークが何度かあり、他人の意見を知ることができて勉強になった」  
「授業の内容が面白くディスカッションも毎回盛り上がってよい意味で時間がなかった」などなど。  
講義、個人ワーク、グループワークの配分を最適化するのであるが、もう少しグループワークの時間を増やしてもよいかもしれない。

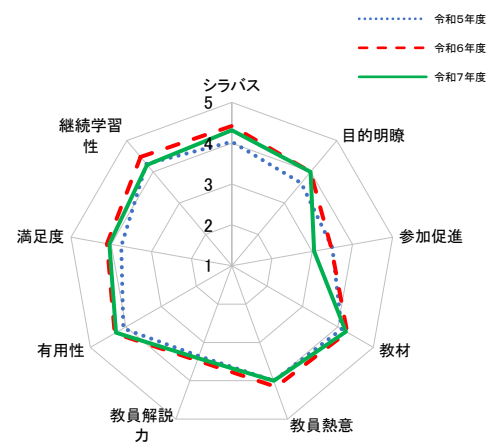
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： データサイエンス特論

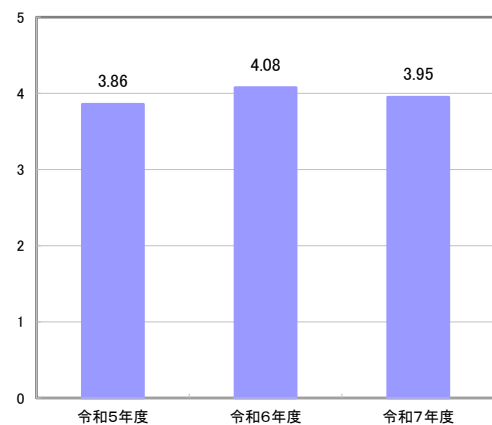
氏名： 岩政 幹人/林 久志

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

最新のLLMとデータサイエンスの関係性などは興味を持ってもらった。一方、講義が一方的であるとか、盛りだくさんというFBもあった。浪岡先生の講義と連携したほうがよいとの意見もあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

詰め込みすぎというのは元の教科書ベースにしていたからそうになっていた。少し内容を見直して、厳選して軽量化を行う。LLMは好評だったので、基礎+LLMではどうなるという組み立てにすることにより、浪岡先生の講義と、一部補完関係にあるようにしたい。

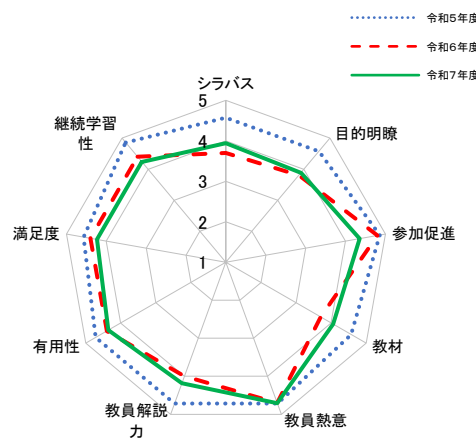
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： プロダクトデザイン特論

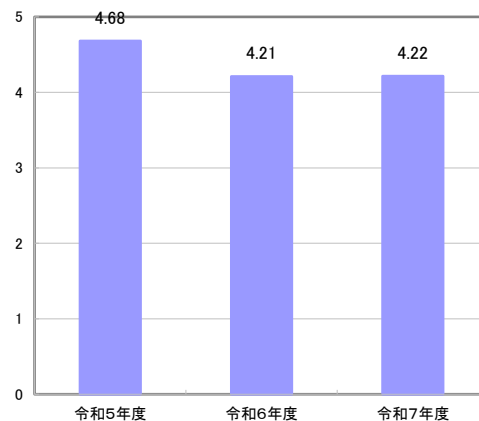
氏名： 内山 純

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

本授業は、プロダクトデザインの基礎的な知識・スキルを有することを前提とし、講義とグループワーク・個人制作を組み合わせた構成で、専門性の高い実践力の養成を目指している。第1Q授業評価アンケートでは、授業評価全体の平均が「4.22」、教員の熱意が「4.71」、満足度が「4.24」と、おおむね高い評価を得ており、特に指導姿勢や進行方法に対する肯定的な評価が多く寄せられた。一方で、「課題の自由度が高く取り組みが難しい」「休憩時間が短い」といった指摘も一部見られた。項目別には「シラバス（3.94）」「目的明確（3.88）」などに改善の余地があり、履修条件や授業設計の意図が十分に伝わっていない可能性も考えられる。今後は、履修前・履修初期の情報共有を丁寧に行い、専門職大学院としての水準を保ちつつ、主体的に挑戦する学生を支える教育環境を整備していく。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今年度も、履修者のスキルや意欲に応じた個別対応型の課題設定と制作指導体制を継続する。デザイン未経験者を含む履修生の中でも著しい成長が見られたケースが複数確認された。課題の自由度に対する戸惑いには、初回ガイダンスでの手法例提示や、制作過程でのフィードバック機会を増やすことで対応する。また、「シラバス」や「目的明確」に関しては、履修前・履修初期における情報共有を強化し、履修者が自身の学修設計を適切に行えるよう支援する。授業の水準は維持しつつ、挑戦を後押しする環境を今後も整備したい。

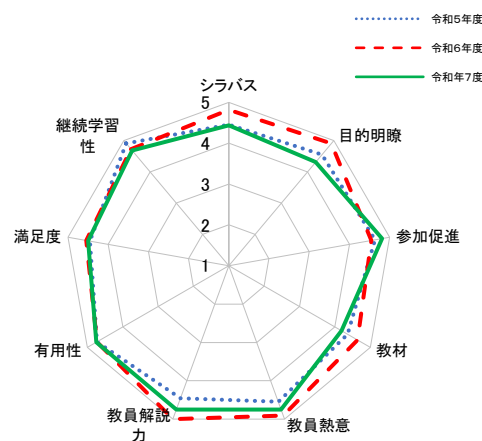
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： プロトタイピング工学特論

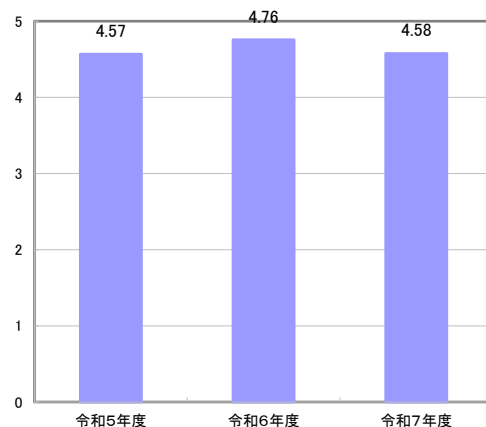
氏名： 近藤 嘉男/内山 純

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

重要な点として、まず対面と遠隔授業のバランスが評価され、遠隔授業により通学負担が軽減された一方で、対面での進捗確認や質問が可能な点が好評でした。また、個別指導の丁寧さや迅速なフィードバックが学習意欲の向上に大きく寄与しており、学生の自主性とモチベーションを促す授業設計が高く評価されました。さらに、実際に制作物が形になる経験や、仲間との共有・相互フィードバックによって学びが深まったという声も多く見られました。一方で、一部の初学者にとっては課題が難しく、教材や説明の明瞭さに問題があることや、授業全体のスケジュール提示についても指摘されており、段階的な指導や教材の工夫、早期の情報提供が求められています。また、遠隔授業における画面の視認性や操作説明の方法改善も検討課題とされています。総じて、本授業は技術習得と創造力の育成において高い満足度を得ており、いくつかの改善を行うことで、より優れた教育体験が実現されと考えられます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今後のアクションプランとして、良い評価を得た「対面と遠隔のバランス」「個別対応」「自由な制作環境」は継続・強化し、特に後半の進捗共有や相互学習の機会を積極的に設ける方針です。一方で、初学者への配慮として課題の導入部分をより簡易にも取り組めるよう再考します。遠隔授業での画面視認性の問題には、画素数や操作の速度を落とすなどで改善をしていきます。また、全体の講義構成や最終課題の提示は初回に明示し、より見通しの良い進行を図ります。

## ■ 第2クォータ アクションプラン ■

### 1 各コース共通科目

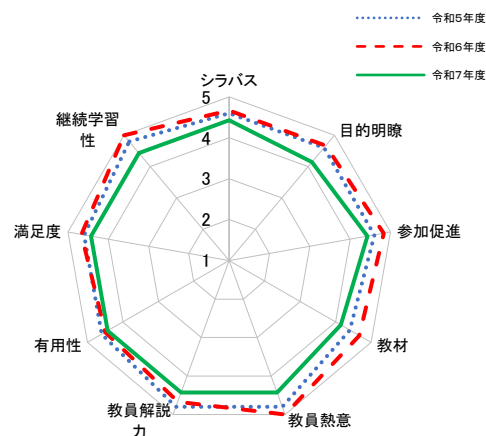
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： グローバルコミュニケーション特論

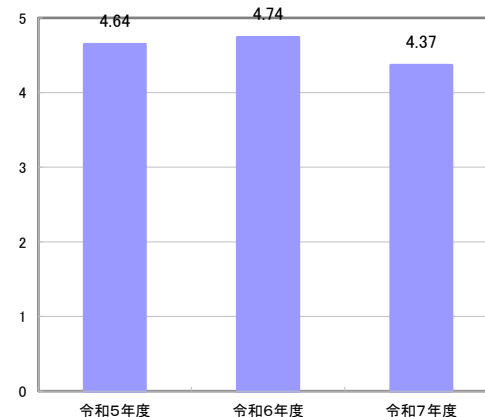
氏名： 前田 充浩

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

毎回講義冒頭で実施している国際情勢の議論に対する関心が極めて高い評価を得ている。  
ディベートの実践については、人生で初めての体験であり、役に立ったとの評価である。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

ディベートについては、やり方の説明について、より効率的な方法を検討する。  
国際情勢の議論については、事前の準備をより詳細に行い、効率的で質の高い議論を誘導するように努める。

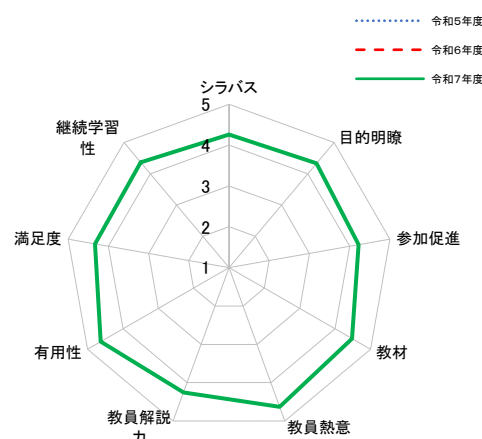
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 産業技術特別講義2

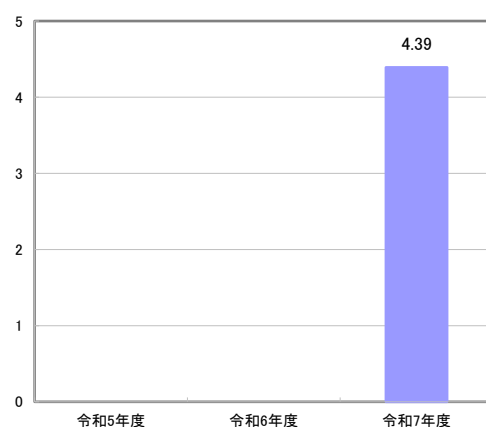
氏名： 中内 遼吾

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

良かった点としても悪かった点としても、最終課題に設定したミニプロダクト制作に対するコメントが最も多かった。課題制作を進めるにあたって本筋と異なる部分で苦勞がかかったという声が共通してみられたため、この点はアクションプランを立てて次回改善することが必要である。逆に良かった点として、課題制作を通じて実践的な学びを得られたとの言及が多かった。授業内容については、ビジネス応用に寄せて実践を重視する項目立てとした点を好意的に評価する意見が多い一方、難易度の高さを指摘する声も複数みられた。講義中の質問に対して時間をかけて対話した点への評価が多い一方、グループ活動を通じた双方向性やフィードバックを期待するコメントもあった。遠隔ツールの利用については総じて好意的な意見が多く、それによって時間を有効活用できたとする意見や、繰り返し視聴できることで復習に役立ったとする意見が目立った。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

好意的評価として最も多かったのは実践的な内容だったという点であるため、引き続きビジネス応用を見据えた内容の充実を図りたい。

課題制作にあたって、授業で用いたクラウド計算リソースの（特にGPUの）制約で苦勞した旨のコメントが目立った。潤沢な計算リソースがない状況下でいかに開発を工夫するかという技術知識も重要なトピックといえるのでその点に関する解説を次回に盛り込むことで対応したい。また、提出物の一つに設定した動画ファイルのmanabaへのアップロードの難しさを初めとしたレギュレーション面の指摘に対しては、より効率的に行える方法を探るかレギュレーション自体の変更を検討して改善を行いたい。

## ■ 第2クォータ アクションプラン ■

### 2 事業設計工学コース科目

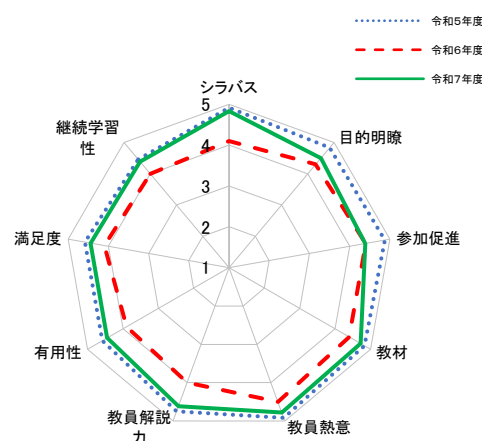
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 意思決定サイエンス特論

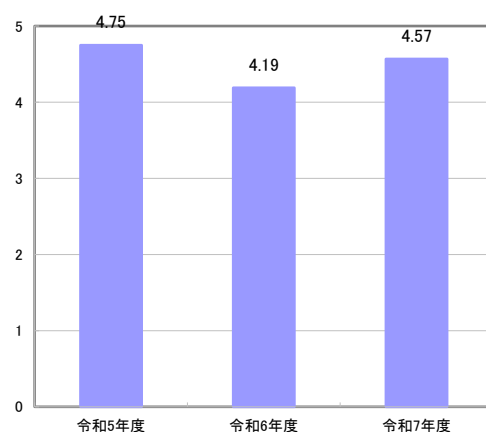
氏名： 細田 貴明

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

全体評価: 全体として一定の評価を得たが、学生のニーズが多様であることが判明した。講義内容: 講義内容に満足する声がある一方、より深い専門知識や幅広い分野に関する内容を求める声も見られた。manabaの活用: manabaを利用した質疑応答が理解促進に非常に貢献し、特に高く評価された。グループワークの公平性: グループワークにおけるタスク分担の不公平感や、教室内のグループメンバー固定に対する指摘があった。遠隔参加者についても同様にメンバーを固定すべきとの意見があった。演習の準備: 演習前の準備不足が議論の停滞を招くことが問題点として指摘された。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

ニーズへの対応: 深掘りした専門的な内容や多分野の知識を定期的に提供し、学生の多様な学習ニーズに応える。manabaの継続活用: manabaを活用した質疑応答の仕組みを継続し、学生の理解促進を引き続き支援する。グループワークの改善: グループワークのタスク割り当てを事前に明確化し、公平性を確保する。また、遠隔参加者も同様にグループメンバーを固定する仕組みを検討し、参加の公平性を担保する。演習の円滑化: 演習前のガイダンスや追加資料の提供を強化し、学生が円滑に議論を進められるようサポートする。

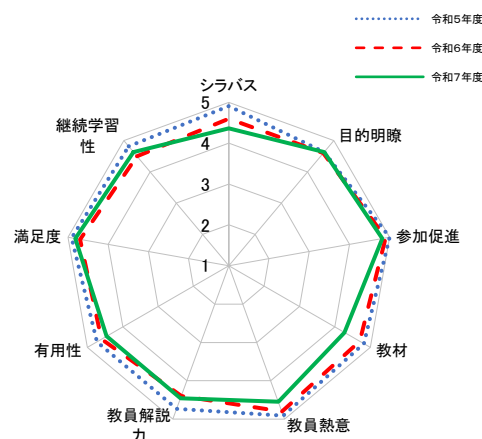
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： エマージング・イノベーション特論

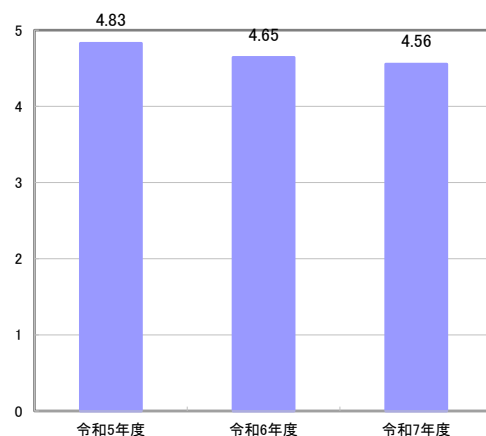
氏名： 吉田 敏

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

グループ議論について、多くの意見が出ている。遠隔の参加者は、Meetによって、自分の意見をのべながら、互いの意見を聞くことになるが、参加者の性格やモチベーションによって参加姿勢が大きく異なることになる。この点について、ファシリテーターを指名するなどの工夫をしながら、改善していく必要性を考えている。また、授業の内容について、好意的な受講者と、抽象的・哲学的でわかりにくいという受講生がいる傾向がある。これらは、おそらく受講者のこれまでの経験や思考の違いが原因になっていると考えられる。次年度以降、どこに焦点を絞るべきか、検討をしていくものとする。その他では、講師である自分と直接議論をする時間を増やすことが望まれている点について、今後の検討事項としていくべきだと考えている。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

本授業の対象は、受講者が誰も見たこと・考えたことがない内容が多く含まれている。既に知っている内容に事例などを出すとわかりやすいという印象になり、初めて見ればわかりにくく感じる面があることは否定しきれず、どのような判断をしていくかは課題であると考えている。ただ、受講者がわかりやすく感じることを重視しすぎることは避けるべきだと考えられ、的確な内容をまとめ、授業していくことを目指したいと考えている。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 市場創造技術特論

氏名： 松尾 徳朗

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

#### 【ポジティブなコメント】

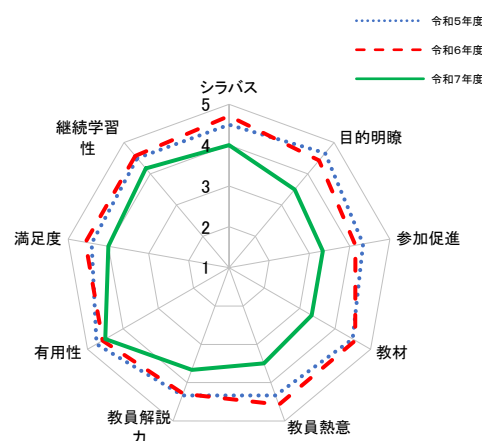
- レポートに含めるべきフレームワークの実践が、グループワーク（演習回）を通じて自然と体験できるのは良い。
- グループ演習が多く、時間配分も演習に大きく配分されていたため、課題へ取り組む時間ができてよかった。
- 一度グループになったメンバーで同じテーマで議論を深めていけた点は演習内容にもよるが、この講義においては毎回変わらない形で進められたことがよかった。

#### 【ネガティブなコメント】

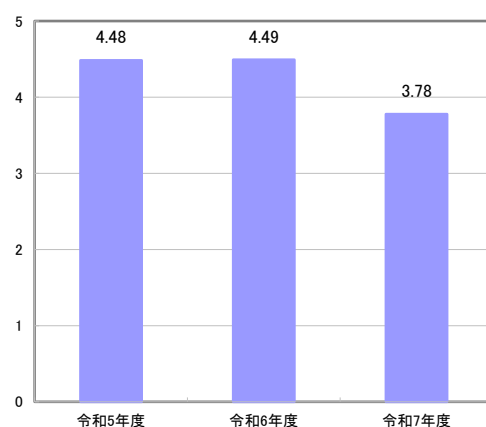
- グループワークの結果（土曜日の授業後の週末の作業の成果）に対して、先生からの講評をいただきたい。
- 講義資料が動画をみても作成する項目が講義資料とは別になってもよいとか、ブルーオーシャン戦略は紹介された戦略をどの箇所でどう関連するかなど演習時に疑問に思われる所が多かったように感じた。

#### 【その他のコメント】

- オンラインで参加したが、グループ演習でどのチームに参加するかわかりにくい回があった。
- 4Qでは先生からのフィードバックをお待ちしております！



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生とのコミュニケーションを増加させ、より双方向が充実する授業設計に改善していきたい。また、スライドなどの刷新やグループ構成などについても改善していきたい。

## ■ 第2クォータ アクションプラン ■

### 3 情報アーキテクチャコース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： アジャイル開発手法特論

氏名： 大内 孝明

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

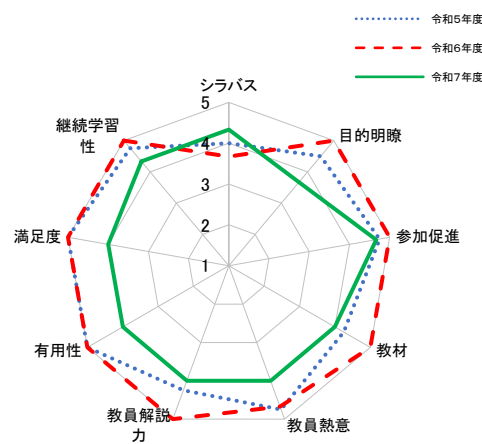
良かった点や、他の授業にも取り入れて欲しい点等について、グループワークが多く、手を動かしたり考えたりする機会が多いことが挙げられた。学生の理解を高めるために、手を動かし、他の学生との意見交換を行うことで自ら気づきを得ること、知識として知るだけでなく、「理解する」ことで実践で学んだことを柔軟に活用できることを目的にグループワークを積極的に取り入れた。そこに対し良い評価を得ることができている。

悪かった点や、改善した方が良い点等について、グループワークでのメンバー間の対話が脱線しがち且つできる人が発言・提案することが多くて個人的にはできることが少なかった気がするということが挙げられた。学生同士がリラックスしてディスカッションをすることで円滑な意見交換が期待できるため、対話の脱線も歓迎していたが、非効率に感じる学生もいたということが分かった。グループワークで理解度が高く経験がある学生とそうではない学生がいることは理解しており、理解度が低い学生は理解度が高い学生に質問して理解を深めてもらいたかったが、気を使ってしまいそれが難しい様子であった。遠慮なく質問できるように講師側から働きかける必要があるように感じた。

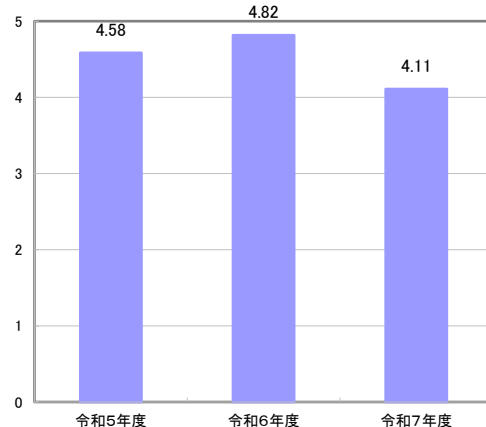
また、大学の教室から講義する回において非常に音質が悪く、遠隔での講義参加に支障があったことが挙げられた。音響設備が多く、前の時間の講義の先生が設定した状態になっているためか、ほぼ毎回異なった状態にセットされており、手探りで音響設定を行う必要があった。毎回学生は遠隔会議ツールで学校外から講義を受けていたため、教室のスピーカーから遠隔会議ツールの音声を出力して聞き取ることは音質も悪く非効率に感じた。講師も同じように使い慣れた音響設備がある自宅から参加していた方が上手く講義を行うことができていた。

授業をより良くするための提案や、授業内容に対する意見、担当教員に伝えたいメッセージ等について、解説部分を動画配信に変更し、「解説動画の動画配信講義」＋「オンタイムでの演習講義（遠隔可）」のセットで構成するとよさそうな気はしましたとの意見が挙げられた。学生の仕事の内容や理解度に合わせて講義の内容を変更しているため、全てを動画配信にすることは難しいが、学生によらないような共通的な部分は一部動画配信を取り入れることも可能なため、効率化の観点で検討すべき内容と感じた。

新型コロナウイルス感染防止対策として遠隔会議ツール（Google Meet、Zoom等）を用いた授業形式になったことについて、「非常に楽しかった。」「非常によいと思います。」との意見が挙げられた。未だに新型コロナウイルスの感染者が増えることもあり、本講義の学生はすべて教室外から遠隔会議ツールで参加していた。グループワークも遠隔で問題なく行っていたことから、遠隔会議ツールを用いた授業形式での講義回数を増やしても良いのかもしれない。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

## 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

動画コンテンツを増やし、講義前から学生に共有することで、学生が都合の良い時間帯に予習し理解を深めることにつながるため、今回の講義録画をもとに動画コンテンツを作成していきたい。

グループワークでは理解度が高い学生は他の学生のサポート役をするように講師側から声がけすることで、理解度の高い学生もそうでない学生も積極的に参加できるようにしていきたい。

音響について、教室から講義を行う場合の設定については学校側に再度レクチャーいただき、ベストな設定を確認しておきたい。また、教室で講義に参加する学生がいない場合は、遠隔会議ツールに特化した設備で行えるようにしておきたい。

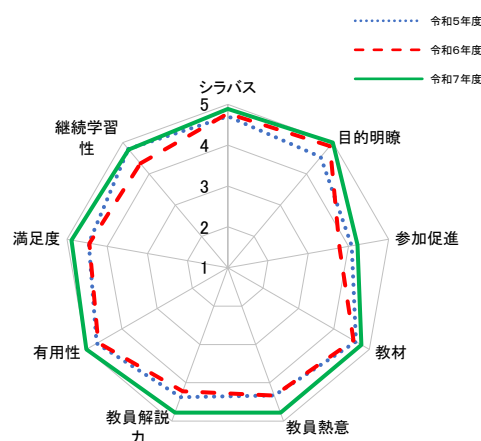
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： システムプログラミング特論

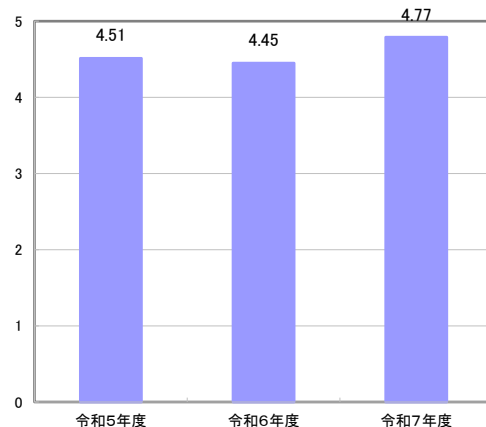
氏名： 小山 裕司

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

今年度は履修者24名、不可6名（うち出席不足4名）、回答者8名。昨年度は評価平均4.45、回収率40.9%であったが、今年度は評価平均4.77、回収率は44.4%であった。誤差の範囲ではあるが、すべての項目で上がっている。特に、授業目的、将来は5.00であった。。最も低い評価は学生対話で4.13と低めではあるが、これも昨年度よりは上がっている。残りは4.75以上であった。またすべての項目で評価5が最も多かった。また、遠隔授業の取り組みも評価されていたように感じた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生からの評価及びコメントは概ね妥当だという評価だと理解しているため、直ちに大きく改善を必要は無いと感じたが、いただいたコメントから善し悪しの内容を受け取り、授業改善を適切に継続したい。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

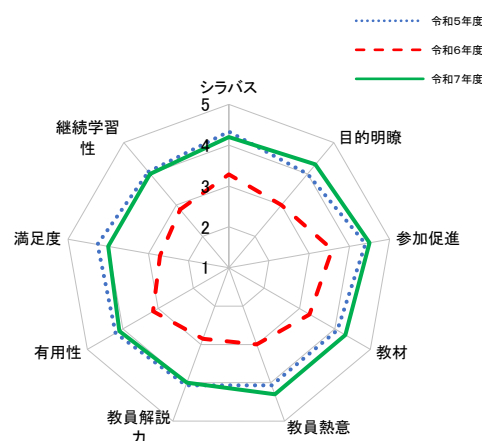
講義名： 情報アーキテクチャ特論2

氏名： 庄司 敏浩

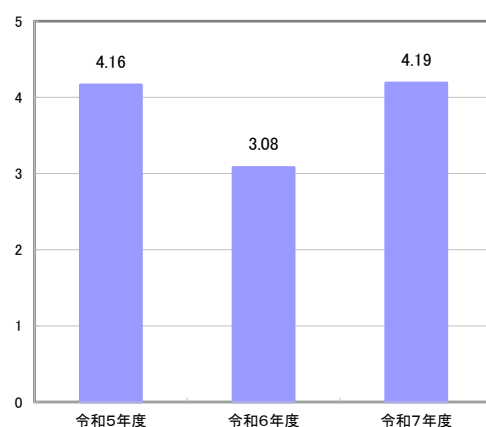
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

「ディスカッションは対面とオンラインを分けた方が良かったと思いました。参加人数が多いため、全員参加のディスカッションは深い議論をすることができませんでした。

」という意見があったが、昨年は対面とオンラインを分けた結果、教室内でのディスカッションの妨げとならず、教室内とオンライン会議室での個々のグループとのディスカッションの流れを把握し、途中で必要なコメントを行うことが困難であったことから、グループ分けをせず、全員のディスカッションを把握できる形式にした。この点については、「メンバー全員でのディスカッションは他に無い取り組みで、様々な人の意見を聞くことが出来たので、非常に参考になった。」「全体でのディスカッションとファシリテーションする機会を作るのはとても良いと思いました。」と前向きな意見も見られ、受講者によって評価が分かれる部分であった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

グループに分けると、適切なファシリテーションを行ってあげないと議論が進まないグループも見られ、また議論の展開を把握せずにオンラインで、途中で軌道修正することも難しいと感じている。教室での授業を中心としたいが、通学が困難な方も参加できるようにハイフレックスを維持した方がよいと考えているが、この形式でディスカッションをより深めるために、特にオンラインで参加している人の発言を得る機会を増やすようなファシリテーションを試みたい。

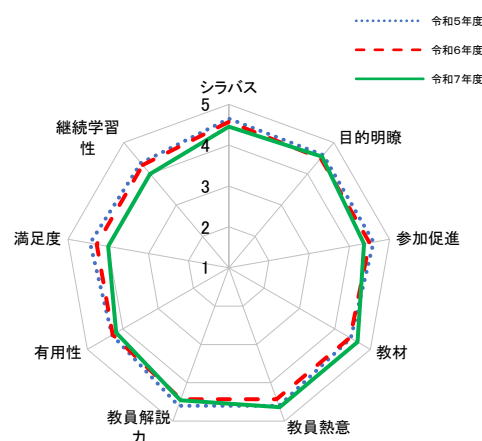
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 情報アーキテクチャ特論3

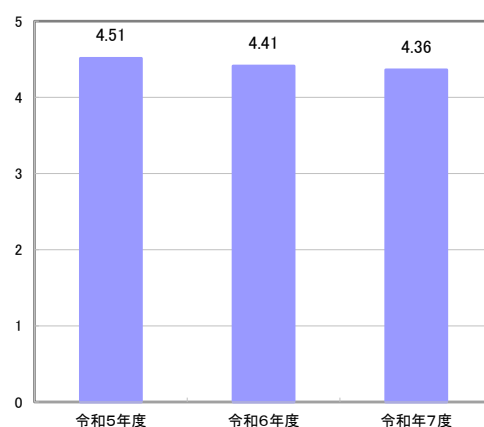
氏名： 中鉢 欣秀

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

授業評価においては受講生の事前知識やモチベーションが多様であり、なおかつ、年度に応じてそれらが異なるため数値的尺度に基づく定量比較は難しい。ある種の目安として評価結果を受け止め、評価の低いものについては継続的に改善を行い、高いものについてはこれを維持して行きたい。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

特段授業内容に関する具体的な改善要請は見受けられなかったが、来年度の授業実施に向けて継続的に改善し、より高い評価が得られるよう務める。教材については様々な手段で得られた改善提案を受け止め、必要に応じて内容の改訂を行っていく。また、シラバスについては、事前の学習者の期待と実際の授業内容との乖離が生じないように注意しながら必要に応じて修正する。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

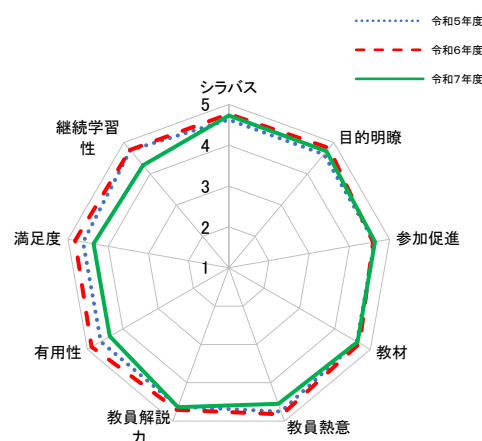
講義名： 情報セキュリティ特別講義1

氏名： 奥原 雅之

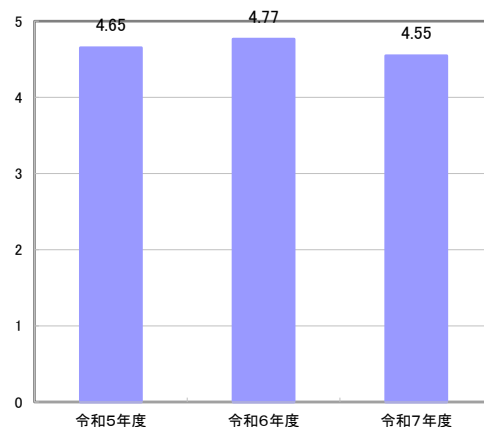
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

・「テキストや事例が古くなっている」という指摘があった。演習に使用しているケーススタディは、内容を更新するとリスクアセスメント関連の資料をすべて再構成する必要がある、かなり大規模なものになる。このため、毎年少しずつ影響範囲を調整しながら更新を行っているが、まだ時代に追いついていない記述が残っている。一方、テキストは最新のISMS国際基準から見ると古い内容が残っているので、次年度以降アップデートの必要がある。

・「グループワークで個人の評価を入れて欲しい」という意見があった。現在はグループワーク評価はグループ単位としている。グループ内で頑張ったメンバーとしては不本意かも知れないが、実際の企業では業務実績は結果で評価されるので、そのある種理不尽な部分も含めて実企業の論理を体感して欲しい。個人の頑張りは試験で評価する。なお、グループ内で手を抜けば自分は楽ができるが、あまり手を抜くとグループの成績が落ちる。どの戦略を選択するかはゲーム理論のケーススタディでもある。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

・テキストおよび演習資料を世の中のITの進化、および情報セキュリティマネジメント関連の国際標準（ISO/IEC 27000シリーズなど）の改版に合わせてアップデートを行う。

・各回の演習の進め方について、簡単なレクチャーを各演習の前に追加する。また、一部テキストと演習教材の間に演習指示に齟齬があったため、次年度以降の教材で修正する。

・グループ編成（途中での編成替えを行わないことを含む）、グループメンバー評価については現状のままとする。ただし、グループメンバー評価のポリシーについては、より詳細な説明を第1回のガイダンスで行う。

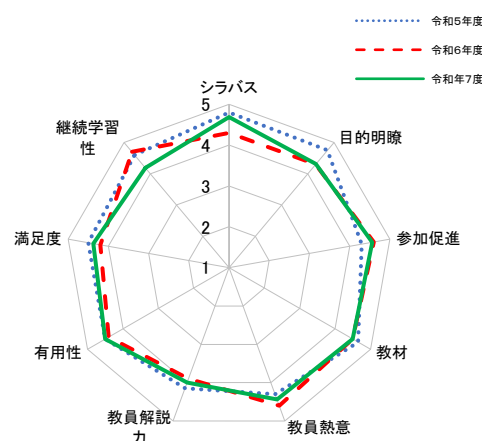
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： データ分析特論

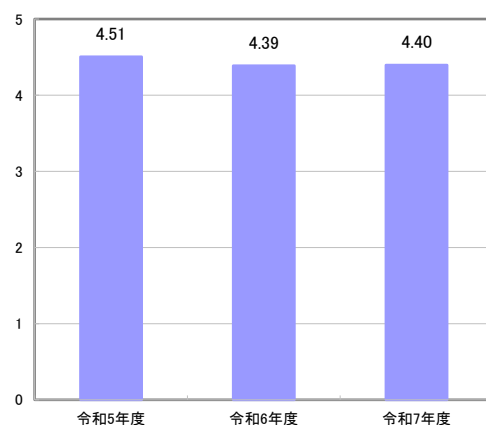
氏名： 浪岡 保男

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

授業資料とこれに沿って提供しているPythonプログラムによって授業内容の理解が進んだことや、プログラムを自身で実際に実行してみることで、実社会におけるデータ分析に応用するスキルが身についたというコメントがあり、授業の目的がほぼ達成できていることがうかがえた。また、授業の合間に問いかけを行い、これに呼応して挙手していただくことで、その時々で学生からのフィードバックをいただいたり、質問しやすい雰囲気が醸成できたと思われる。概ね多くの方が理解されたと思われるが、数式や原理的な事柄のイメージが付きにくかったというコメントもあった。話し方により抑揚やテンポ感を付けると良いのではとのコメントもあった。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

教材については、多くの支持が得られたと思われるので、今回好評であった合間の声掛けやリアクションの取り方について、今後、より自然でより効果的な手法を検討して、学生の状況把握や理解増進に努めたい。ご指摘のあった話し方の抑揚やテンポ感についても改善を図っていきたい。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： ネットワークシステム特別講義

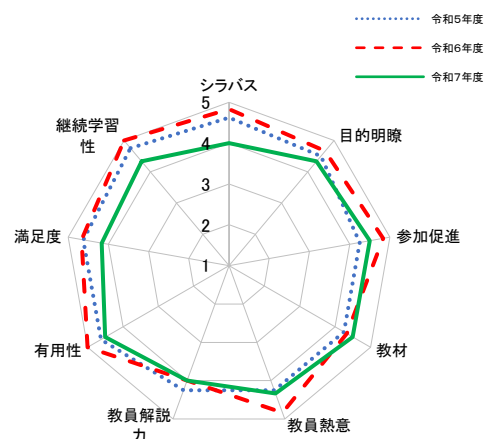
氏名： 飛田 博章

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

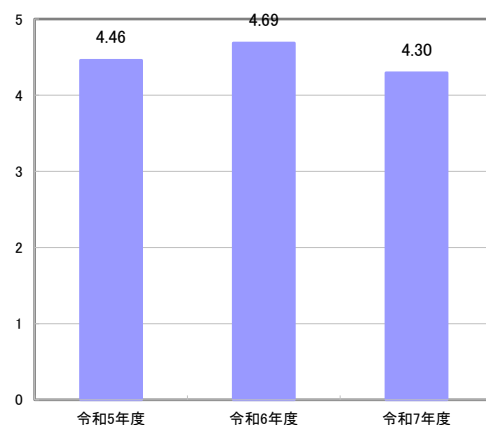
例年通り、グループに分かれて公開サーバを構築する授業を行った。

アンケートの各項目で4以上の評価を得ることができたが、全体的な評価として昨年度4.69から今年度4.30に下がってしまった。

履修者からのコメントとして、初回授業において授業内容の具体的な説明や、前提条件などを周知する必要があると感じた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

次年度はビデオ授業などを効果的に使えるように授業を改善したいと考えている。

また、初回の授業において、授業内容や前提条件を明確にするように内容を改善する予定でいる。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

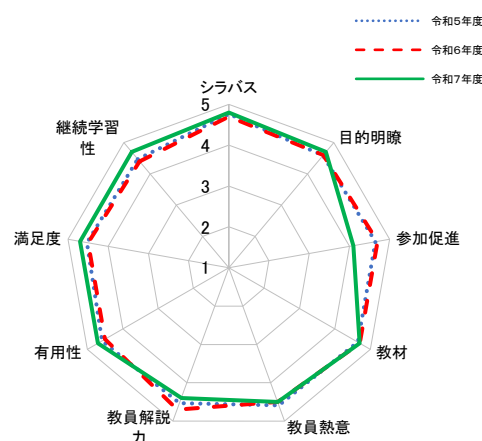
講義名： プロジェクトマネジメント特論3

氏名： 三好 きよみ

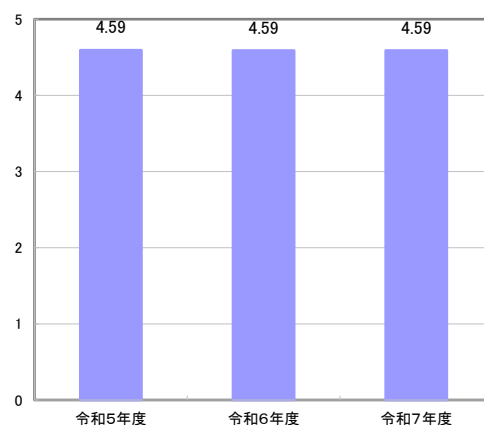
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

以下のようなコメントがあった。

- ・配布資料はどれもわかりやすく、経産省の資料など公開されている情報も紹介いただけたことで、自分から情報にアクセスする際のヒントを得ることができました。
- ・実務で活かせる学びを得ることができました。
- ・個人発表に向けて、授業で学んだことをベースに、自身の経験をケーススタディして資料をまとめたのは、知的で創造的な作業だったと思います。またそれを相互評価することによって、同じ授業のインプットを他の学生の発表を通じてさらに多角的に深く理解することができました。また相互評価でいただいたコメントも大いに励みになりました。
- ・個人発表については、自身の経験を振り返りながら授業内容と紐づけることから、自身にとって腑に落ちやすく知見として身につけやすいと感じました。
- ・WBSやコンフリクト、コミュニケーションなどについてグループワークのための課題やグループワーク、皆の前での10分間のプレゼンなど実践力を鍛える機会があり、良かったと思う。また、他の方の発表を聞く機会も多く、大変勉強になった
- ・録画と対面授業のメリハリが明確でしたので、それに合わせてスケジュールを組むことが出来たのが良かったです。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・毎回の受講レポートの共有、個人発表の相互評価については、教員側では個人ごとの理解度や感想を確認でき、学生側では他の人の状況がわかることで学修成果を高めることができているようである。今後も継続したい。
- ・個人の経験を振り返り、授業内容と紐づけて考察し発表することで、理解が深まっているようである。こちらも継続して実施したい。

## ■ 第2クォータ アクションプラン ■

### 4 創造技術コース科目

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 組込みシステム特論

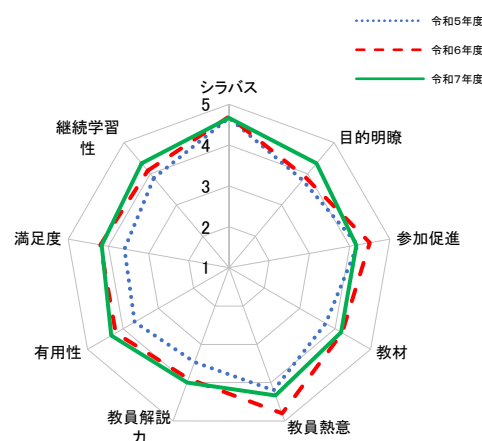
氏名： 村越 英樹

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

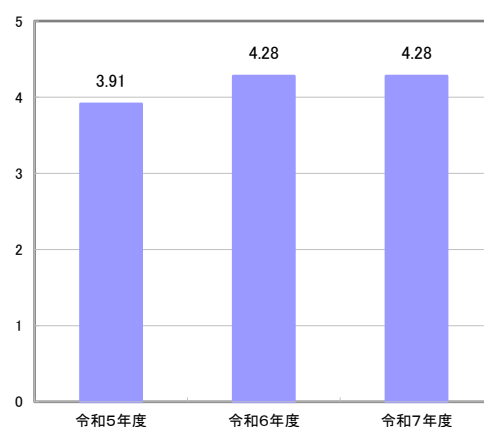
アンケート項目の平均点は4.28点であり、昨年度の4.28点と同じであるが、一昨年度の3.91点からは上がっている。最も良いのは、4.67点のQ3.シラバスと授業内容の相違である。一方、最も悪いのは、4.00点のQ8.解説のわかりやすさであるが、4.00点以上である。

回収率は31.6%と昨年度の45.5%を下回る。

自由記述欄では、毎回のレポートが内容の理解に役立った、という意見を頂いた。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

ハイフレックス授業として実施しているが、毎回の課題に対するディスカッションの時間がうまく実施できず、当方からの問いかけとなってしまったことを反省している。タイムマネジメントをしっかりと行い、時間内にグループディスカッションを実施できるよう努力したい。

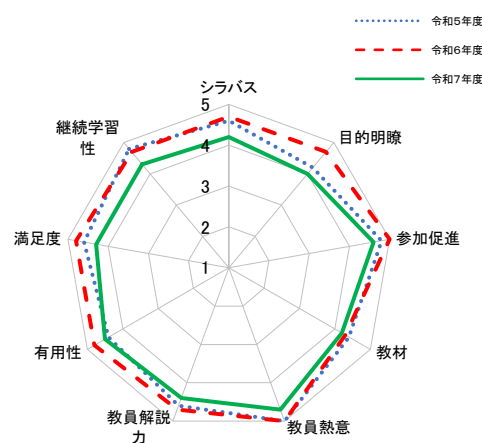
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 造形デザイン特別演習

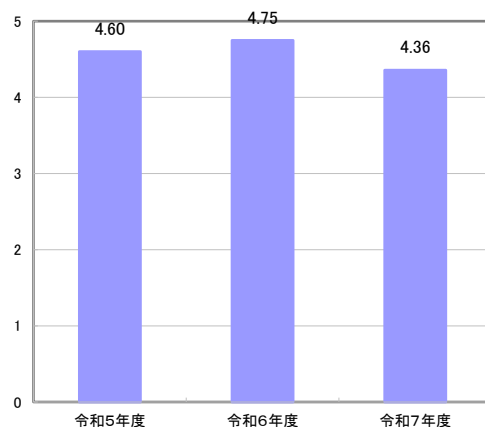
氏名： 内山 純/和泉 秀明

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

2025年度第2Qの授業評価は総合平均4.36となり、引き続き4.0以上を維持している。特に「指導の熱意」「解説のわかりやすさ」「学生との対話」は4.6～4.7と高く、丁寧なフィードバックや個々の状況に応じた対応が高く評価された。また、実務経験に基づく資料紹介や、学生ごとのスキル・関心に合わせた課題設定も肯定的に受け止められている。一方で、授業目的や配布資料については他項目に比べ相対的に評価がやや低く、進行の見通しや課題意図の提示方法に工夫の余地が示された。自由記述には課題の題材設定に関する指摘もあったが、授業開始時には範囲や進め方を説明しており、受講生の理解や背景によって受け止め方に差が生じたと考えられる。全体としては「相談機会の確保」「多面的な学び」など授業の基盤部分が強く支持されており、授業運営の方向性はおおむね良好に維持されているといえる。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今後は、良好な評価を得ている個別指導や丁寧なフィードバックを継続・発展させることで、学生の主体性をさらに伸ばしたい。また、自由度の高い課題設定を活かしつつ、授業冒頭で目的や進行の見通しをより丁寧に共有し、課題の意図がより明確に伝わるよう工夫する。造形演習としての趣旨が学生に理解されやすいよう、題材の例示や説明を補足することで、受講者の戸惑いを防ぐとともに学習効果を高めたい。今後も複数教員体制によるきめ細かなサポートを維持し、学習環境の質を一層向上させていく。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

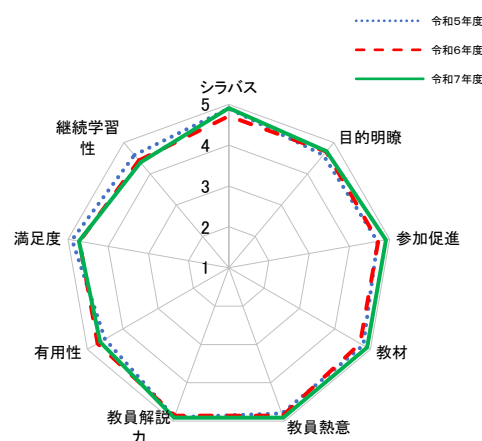
講義名： 信頼性工学特論

氏名： 越水 重臣

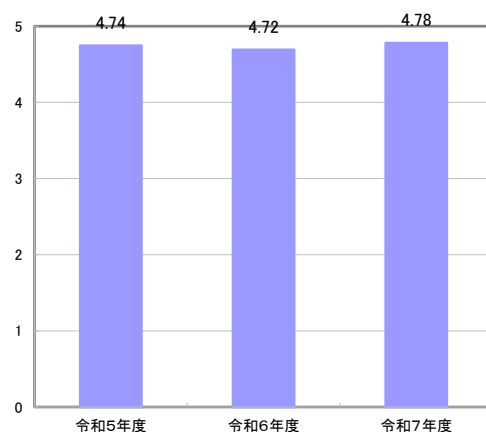
### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

学生による授業評価アンケートの結果、今年度の信頼性工学特論の評点平均値は「4.78」であり、前年の「4.72」から僅かではあるが改善することができた。自由記述では、「授業進行、フィードバック、演習回の頻度が、理解度が深まりやすく、非常にありがたかった」や「ビデオ学習とオンタイム講義とのバランスが良い」や「短い限られた期間（コマ数）と時間の制約下、濃縮された講座内容であり、指導法・講座の組立方法についても参考になった」など授業スタイルに関して肯定的な意見が複数聞かれた。今後もこうした授業スタイルは継続していきたい。

この講義では、講義内で個人演習やグループ演習を行っている。受講生は社会人が大半であり、急な仕事で欠席する場合がある。その際には、事前にメールで連絡してもらい、適宜、課題を与えて欠席した学生が次回以降の講義についていけるようよう配慮した。こうした対応は次年度以降も継続していこうと思う。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

自由記述において、「講義内の例題に比べて、課題の問題は難易度が一気に上がりすぎるように感じました」という意見があった。おそらくFTAのレポート課題に関することだと類推するが、来年度は例題、演習問題からレポート課題までの難易度を段階的に上げていくような工夫を図りたい。また別の意見として「実際の製品事故事例を解析・議論する演習を増やしてはどうか」といったこの授業をさらに充実させるための提案があった。実務における経験値が高い受講生からの提案と推察する。製品事故の調査、解析、発表の構成だと授業回数にして3コマ分の演習内容になりそうである。現在のシラバスに組み込もうとすると、別の単元を削らなければならず悩ましいところであるが、何かよい方法を検討してみたい。

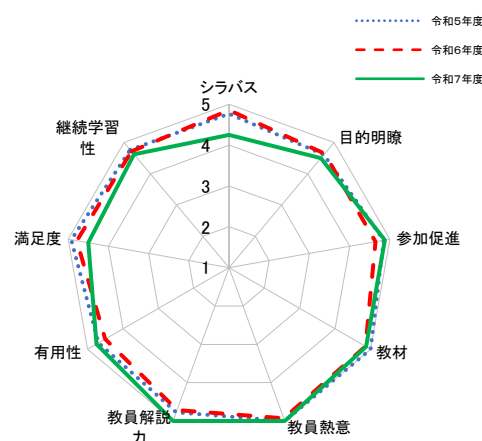
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： デザインマネジメント特論

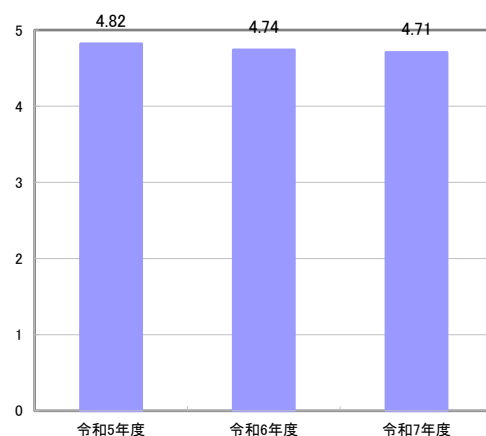
氏名： 上田 太郎

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

基本的に学習の意欲の高い生徒さんが多かったので、興味と吸収力が高く、コミュニケーションも円滑だった。特に個別の質問への回答や、外部デザイナーも交えたオープンなディスカッションなどの対話を通しての授業が効果的だった。また、研究課題やグループワークなどを通して生徒さん同士による学びも効果的で、それぞれが独自の生きた知識や新たなモチベーションの形成に役立った。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

課題はより実践的な経験やスキルを醸成できる環境づくりだと感じる。空間を共有する対面と、そうでないオンラインとでは大きくこの点が異なる。本学は対面とオンラインの両面から生徒さんをサポートする姿勢だが、クリエイティブな活動の経験値を得ることに限っては同質にはならない。時間的・位置的な制約もある生徒さんにとっては対面の難しさがあるし、自由度を与えるのは必要だ。ただアンケートでもあったように対面の効果を感じている生徒さんもいるので、このバランスをどう授業設計に生かすかが課題だと感じる。

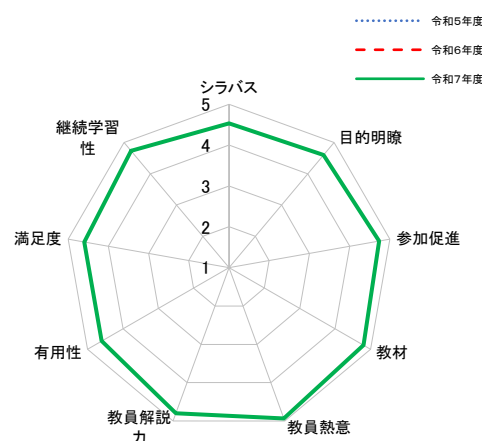
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： デジタル空間デザイン特論

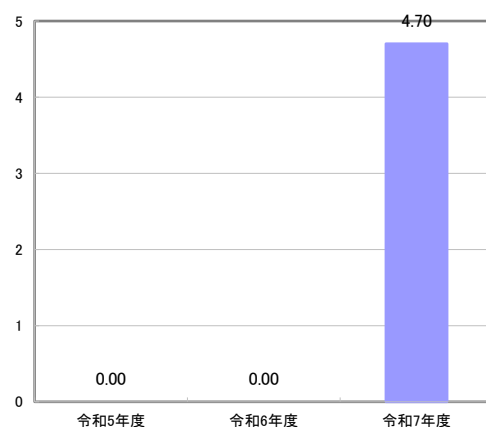
氏名： 河西 大介

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

アンケート結果から、授業に対して多くの学生から前向きな評価をいただいた。特に「丁寧な解説とこまめなフィードバック」「最新機器を実際に操作できる体験」「目的やゴールを明確にした進行」「オンラインと対面を組み合わせた効果的な構成」といった点は、授業を充実させる上で重要な要素であることが示された。これらは他の担当授業においても取り入れるべき配慮であるとする。また、360度カメラや3Dスキャナ、VRゴーグルなどを実際に扱うことが学びを深める契機となったとの意見も多く寄せられており、今後も実習を通じた体験的な学びを重視していきたい。さらに、「実務に直結する学びとなった」との感想もあり、学生の多様な背景に応じて授業計画を柔軟に設計することの必要性が改めて確認された。一方で、機材不足や不具合への対応、グループワークにおける参加度の差、資料配布のタイミング、設備利用の制約など改善を望む声もあり、これらについては今後の授業運営において配慮していく必要があると考える。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

アンケートで得られた良い点を踏まえ、今後の授業では今回扱った機器に加えて、夢工房などに設置されている機器の活用についても検討していきたい。また、グループワークにおける参加度の差については、役割分担を明確にし、必要に応じて個人ワークや小規模ワークを組み合わせることで改善を図っていきたい。さらに、設備利用に関しては、安全面や管理面の課題を考慮しつつ、可能な範囲で利用機会を拡大することが、より実践的な学習環境の整備につながると考える。これらの取り組みを段階的に進め、授業運営の一層の充実を図っていきたい。

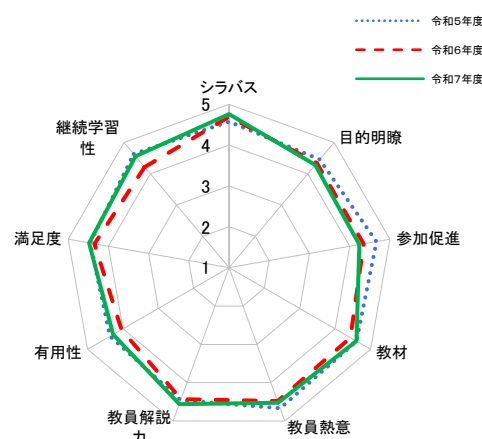
## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： 認知科学特論

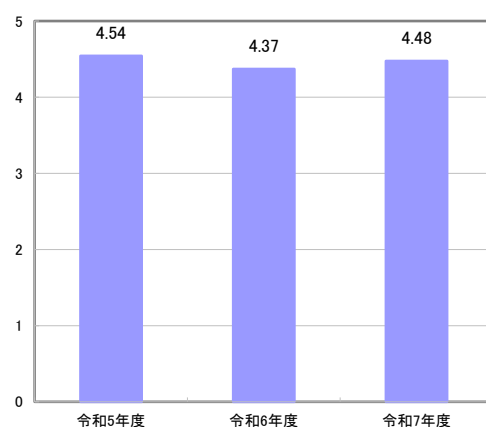
氏名： 田部井 賢一

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

学生からの評価では、本授業における「主体的な調査・共有の仕組み」が特に高く評価されていました。具体的には、授業中や事前学習で論文やウェブサイトを検索し、manabaに書き込む活動が「リサーチ力や視野の拡大につながった」「眠くなりにくく集中できた」と好意的に受け止められています。また、Google共有資料の活用や録画配信など、学習環境の柔軟性も「社会人でも受講しやすい」「自分のペースで学べる」と支持されていました。さらに、授業内で紹介された論文や研究成果を通じて「最新の知見を学べた」「自分の研究テーマを考える刺激になった」との声があり、学術的な深みも確保できていたことがわかります。一方で、改善点としては「投稿が多いと全てを読むのが大変」「講義の広がりが大きいため位置づけが不明瞭になることがある」といった指摘がありました。また、学生とのインタラクション不足や、小テスト・講評などフィードバックの強化を求める意見もありました。総じて、学生は主体的に学びを深められた授業と感じており、その上で学びの整理と双方向性の拡充が求められているといえます。



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

良い評価として挙げた「論文検索・manabaでの共有」「柔軟な受講環境」は今後も継続・強化し、投稿内容を整理・推薦できる仕組みを検討します。また、授業の広がりに対する指摘には、毎回の講義冒頭で「認知科学の全体像における位置づけ」を示すことで学びの流れを明確化します。さらに、学生との双方向性を高めるために、短い小テストや投稿内容への講評を導入し、理解度確認とフィードバックの充実を図ります。これにより、主体的な学びを維持しつつ、学習効果の整理と深化を促す授業へと発展させます。

## 「学生による授業評価」調査に対するアクションプラン

講義名： AIデザイン特論

氏名： 林 久志

### 1 学生の評価から重要と思われる点（右のグラフや、その他コメントから）

○難易度や構成や内容は適切

「ほかの授業と比べると難易度は高かったものの、全体として非常に機能的な授業構成であったと感じます。」

「AIデザイン特論は、私にとって非常に重要な授業となり、2年次PBLや本学卒業後の研究テーマの方向性を定める大きなきっかけとなりました。」

○演習やグループワークが好評

「全ての演習問題に取り組めてはいなかったが、演習課題があってこそ立ち止まって考えることができたので良かったです。また、具体例を挙げるような問題は、自分では視野が狭く思いつくことに限界があったため、他の人の回答が非常に参考になりました。」

「グループワークでは要件が細かく指定されており、授業カリキュラムに沿って取り組むことで、理論の理解、文献調査、グループディスカッション、スライド作成・発表、論文執筆構成といった、研究計画から実践に至るまでの一連のスキルを養うことができました。」

○グループワークの課題

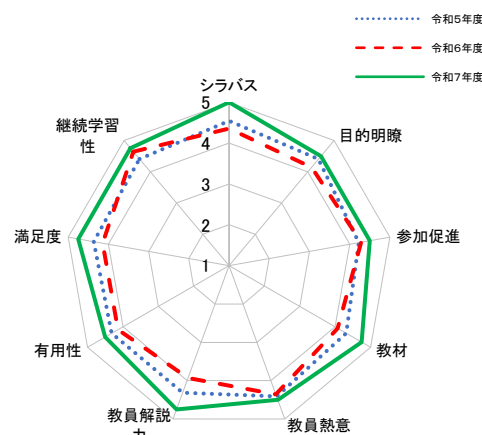
「1回目のグループワークの人数が3人と少なかったのですが、ある程度多めで理解の幅がいろんな人がいることで議論が進むような印象を持ちました。」

「最初のグループワークの発表に関してはマルチエージェントシステムとしてのモデリングが適切であるのか怪しい班が存在していた。」

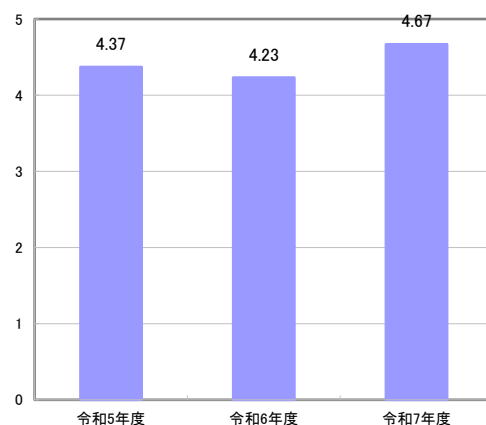
○遠隔講義は問題なし

「遠隔会議ツールの運用において、問題はありませんでした。」

「特段ございません。」



評価項目別の分布



評価平均値の年度推移

### 2 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

講義内容や構成は好評で安定してきており、継続するが、最近のLLMの活用動向も適宜トピックにいれることを検討する。

グループワークや演習は好評であるものの、各グループの人数や課題設定の適切性に関しては注意する。

[執筆者]

東京都立産業技術大学院大学（2026年3月現在）

|        |                       |
|--------|-----------------------|
| 橋本 洋志  | 東京都立産業技術大学院大学学長       |
| 吉田 敏   | 東京都立産業技術大学院大学産業技術研究科長 |
| 松尾 徳朗  | 東京都立産業技術大学院大学産業技術専攻長  |
| 板倉 宏昭  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 上田 太郎  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 内山 純   | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 追川 修一  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 奥原 雅之  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 越水 重臣  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 小山 裕司  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 中鉢 欣秀  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 飛田 博章  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 中内 遼吾  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 浪岡 保男  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 林 久志   | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 細田 貴明  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 前田 充浩  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 三好 きよみ | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 三好 祐輔  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 村越 英樹  | 東京都立産業技術大学院大学教授       |
| 田部井 賢一 | 東京都立産業技術大学院大学准教授      |
| 河西 大介  | 東京都立産業技術大学院大学准教授      |
| 柴田 淳司  | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 張 晁逢   | 東京都立産業技術大学院大学助教       |
| 和泉 秀明  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 岩政 幹人  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 大内 孝明  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 近藤 嘉男  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 庄司 敏浩  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 伏見 靖   | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |
| 安川 要平  | 東京都立産業技術大学院大学非常勤講師    |

東京都公立大学法人

東京都立産業技術大学院大学

AIIT FD レポート第 39 号 2026 年 7 月

発行：東京都立産業技術大学院大学 FD 委員会

〒140-0011 東京都品川区東大井 1-10-40

<https://aiit.ac.jp/>

